

第23期
日本インド学生会議
活動報告書
-2019-



-Japan India Student Conference-
Since 1996

開催地：東京

開催期間：2019年8月13～22日

――目次――

1. 実行委員長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・ pp. 3～4
2. お世話になった皆様からのメッセージ・・・・・・・・ pp. 5～15
3. 基本理念・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 16
4. 団体概要・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 17
5. 第23期 日本側実行委員 出席者メンバー・・・・・・・・ p. 18
6. 第23期 コルカタ側 出席者メンバー・・・・・・・・ p. 19
7. 事業計画・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 20
8. 本会議日録・・・・・・・・・・・・・・・・ pp. 21～30
9. 分科会・・・・・・・・・・・・・・・・ pp. 31～42
10. 「教育」という観点からみた文化交流会・・・・・・・・ pp. 43～50
11. Message to Delegates from Kolkata・・・・・・・・ pp. 51～52
12. 後援・協賛への謝辞・・・・・・・・ pp. 53～54
13. 写真集・・・・・・・・ pp. 55～57
14. 歴史・沿革・・・・・・・・ pp. 58～60
15. 規約・・・・・・・・ pp. 61～67
16. 編集後記・・・・・・・・ p. 68

1. 【実行委員長挨拶】

第23期日本インド学生会議実行委員長 望月 晴仁

22年の長い歴史がある当日本インド学生会議(通称、JISC)は、日本国内のインド界隈のなかで、非常に大切な役割を果たしてきました。21期に参加した者の多くは、22期においても当団体に残って活動を支え、大学生活の貴重な2年間を日印関係の発展に費やしてくれました。当団体に所属する者の当事者意識が徐々に強くなっていくなかで、23期も引き続き大きく躍進するかと思われました。外面的にはそういえるなかで、しかし大半の参加者が時間に余裕がない大学4年生ということもあり、2019年東京開催の当学生会議の運営は難航を極めました。各々やるべきことが他にある中でも当学生団体、ひいてはこれからの日本とインド関係の発展に尽力しようと思えた理由がありました。

それはこれからインドをはじめとする南アジアの国々が何かしらの形で世界の力関係を大きく左右するだろうという期待でした。そして、そのなんとなく出回っている事実が確固たる事実だと思えたのが、第22期(2018年度)で行かせていただいたコルカタ、(実はあの岡倉天心と縁の深い)シャンティニケトン、(ニュー)デリー出張でした。空港のお迎えから見送り、就寝直前まで尽くしてくれるハードワーカーでかつ底知れぬ元気には、私たちの身体と精神力ではついていけなくて、それが反って力強い故かどことなく魅力的に映るのです。そんな無限のエネルギーで溢れる彼等と共に生活をすると、正直軋轢も生まれます。それが時に<時間感覚の違い>やく分科会に対する向き合い方の違い>といった即解決しなければいけないような問題を生み出すこととなるのですが、そんな彼等と妥協点を見つけていく時間がそれはまた楽しいのです。至らぬ点は多くあると思いますが、本報告書を手にとっていただいた皆様には、「改善点があるものの憎めないよね」と思っていただけのような面白さを感じ取っていただければ幸いです。そして第24期(2020年度)ではインド(場所は各参加者が決定する)に行くことのできるチャンスがあるので、是非同じような経験をさせていただきたいと切に思います。

最後に、「国際関係」や「開発」関係の分野を専攻されているかどうかに関わらず、これから当団体に所属してくれる学生にお伝えしたいことがあります。私たちは、東京開催とインド開催両方に出席することではじめて両国間の関係を深く、そしてフェアに感じ取ることができると信じています。インドに行ってみることはもちろん大切なのですが、行ける機会に巡り会えた人たちは学生かどうかを問わず帰国した後に<何ができるのか>を考えていただき、世界との向かい合い方を考え直していただければと思います。また、東京開催の年に協力してくださる方々には純粹無垢なインド人学生が<何に対して驚き><何に対してやっぱり日本は違うな~>と、関心するののかという問題意識をもって参加していただければと思います。23期では参加して下さった8人中、7人が海外に出ること自体がはじめてだったので個人的には東京開催の方が発見は多くありました。

末筆ですが、この場をお借りして改めて第23期日本インド学生会議の実現に協力してくれた日本側運営・実行委員及びインド側参加者には感謝しつつ、社会人になった後も両会議で経験したことを糧に精進していただければと思います。そんな私たちの成長の軌跡を映した報告書を一読して頂けると幸いです。そしてこのような貴重な体験をさせていただき、インドに対する思いを熱くさせてくれたのも、ひとえに財団、大使館、企業、法人、支援者そしてOBOGの方々からの無償のご厚意があることによるものだと思っております。全ての関係者の方々に深く感謝を申し上げます。また、本書に興味をもっていただき誠に、ありがとうございました。

President from the Student of Inida Anusha Banerjee

The 23rd India Japan Students' Conference, held in Tokyo, has been one step among many in strengthening the relationship between India and Japan- two countries who have shared a rich history rooted in strong cultural ties.

The theme of this year's conference was "Education and Moral Values" - something all of us are well-acquainted with, being students ourselves. Even though the terms *education* and *moral values* are intimately associated with one another, we often forget that having a fancy degree is not all-inclusive; good morals are, *per se*, the result of a good education. The table discussions held during this year's conference explored and debated on various methods by which moral values could be incorporated into children. We also visited Tokyo University to delve further into the topic of education in Japan.

The India Japan Students' Conference has not only been a platform for thoughts and ideas, but also of culture and lifestyles. This year's conference saw a multitude of cultural exchanges- starting from a Kabuki experience to cooking Japanese food, and visiting an artificial onsen, to home visits and kimono-wearing sessions. We also visited a temple dedicated to Shri Subhash Chandra Bose on his death anniversary. This enlightened us on the richness of the history shared between India and Japan even further.

Throughout the conference, the members of both the Japan and India side worked hard. On behalf of the members of IJSC, I'd like to heartily thank the members of JISC for taking care of us during our time in Japan. We'd also like to thank Nigam sensei and Partho-san for giving us this golden opportunity.

To be a part of the 23rd India-Japan Students' Conference as the President of such a dynamic team, I am eternally grateful. The experience has been nothing less than a life-changing one- something which has given more clarity to all our dreams and pushed us to strive towards it. As another conference comes to a close, we look forward to hosting the Japanese members next year in hope that it will reinforce our bond further and lead to even better experiences.

Finally, to all members: お疲れ様でした!

2. 【お世話になった皆様からのメッセージ】

駐日インド大使サンジェイ・クマール・ヴァルマ駐日インド閣下

भारत के राजदूत
AMBASSADOR OF INDIA



भारत का राजदूतावास
Embassy of India
2-2-11 Kudan Minami, Chiyoda-ku
Tokyo 102 0074



Message

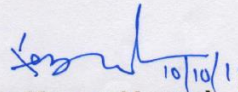
I note with great pleasure the successful completion of the 23rd Japan-India Student Conference (JISC) organised in Japan from 12-22 August 2019 and that the organizers are bringing out a report to reflect on the valuable inputs obtained during the interactions.

2. I am sure that the friendships forged and the experiences gained during the 23rd JISC will contribute to furthering mutual understanding and friendship among the participants besides broadening their global view to cultivate the spirit of 'global citizens'.

3. In recent past as well as in near future, a large number of talented young Indians visited / shall visit Japan under various frameworks such as student exchanges for short & long term courses / trainings, Technical Internship Training Programme, etc. This is and will lead to further strengthen the relations between India and Japan. JISC has also been contributing to this process.

4. I take this opportunity to convey best wishes to the JISC, its members, its organisers and all the participants.

Tokyo
10 October 2019


(Sanjay Kumar Verma)

在コルカタ日本国総領事 笈賀政幸様

第23期日本インド学生会議が成功裏に実施され、同会議を通じて日本とインドの学生が相互理解と友情を深められたことを、心よりお慶び申し上げます。

今回の会議は、日本での開催ということで、インドの学生さん達が、訪日前には期待と抱負を語ってくれ、また、訪日後には体験したことの報告をしてくださいました。到着した日から出発の日まで、本当に様々なことがあり、如何に感銘を受けたか、如何に勉強になったか、如何に楽しんだか、それぞれ、心弾ませた語り口で話してくださいました。私は、これこそ、学生会議が成功したことの証だと思いました。

インドの学生さん達を日本で受入れ、議論をし、一緒に行動し、インドの学生さんが日本のことをより良く理解することに協力頂いた日本の学生さん達、協力・支援してくれた方々にお礼申し上げます。そして、こうした活動を通じ、日本とインドの学生間の相互理解と友情が深められ、「特別戦略的グローバル・パートナー」としての日本とインドの協力関係の強化と促進に寄与されたことに敬意を表します。

日本インド学生会議の更なる発展と両国の学生さん達の益々のご活躍を心より祈ります。

第23期 日本インド学生会議の成功を祝して

日本インド学生会議は、創設以来、本年で23年目を迎え、3年に一度と決められているインド人学生の受け入れを成功裏に終えた由、慶賀の至りです。

8月14日に東京の代々木オリンピックセンターでの開会式から始まり、三つの分科会に分かれて活発な議論が行われたほか、フィールドワークとして各種の文化交流や日本文化体験、在日インド大使館の訪問など充実したプログラムが組み立てたと聞いております。諸準備やインド学生滞在中の各種便宜の供与まで、ボランティア精神で成功をもたらした学生諸君及び本学生会議の創設者でありアドバイザーでもある長浜浩子様のご努力、ご献身に心から敬意を表します。日本は、本年、インドの一部地域をしのぐ暑い夏でしたが、インド人学生は受け入れ側の皆様の熱気にも強く印象付けられたものと拝察いたします。

日本インド学生会議は、日印間の交流が本格化する2000年より5年もさかのぼって創設され、23年目を迎えました。日印青年交流の先駆者であり、毎年、大学生が入れ替わるにもかかわらず継続発展していることを心強く感じております。かつて学生会議のOB・OGに対して行ったアンケートの結果、日印双方の参加学生は、学生会議の後50%が相手国を訪れた由です。また、相当数が卒業後に相手国で就業などを行っている由です。

日印関係は、私が駐インド日本大使として勤務していた1998年から2002年の間、98年5月のインド核実験による関係の冷却化の後、2000年8月の森喜朗総理大臣（現在、日印協会会長）の訪印により、世界のための日印関係を目指した「21世紀のための日印グローバル・パートナーシップ」を発足させるという大きな転機を迎えました。その後、小泉純一郎総理とマンモハン・シン首相により、「戦略的グローバル・パートナーシップ」に格上げされました。さらに、安倍晋三総理とナレンドラ・モディ首相により、「特別戦略的グローバル・パートナーシップ」へと、形容詞が三つも付された最高度の二国間関係となりました。

この過程で、日印関係は、外交・安全保障、貿易・投資、科学技術、人的交流、地方政府間交流（インドの州と日本の県、両国の主要都市の関係）など、官民の多くの分野において拡大深化が見られます。

デリーで大成功した日本式の地下鉄システムは、インドの多くの大都市に拡散しつつあります。デリーとムンバイ間の1500キロメートルを結ぶ貨物新線の建設や産業大動脈の建設計画も進捗中ですが、さらにチェンナイ・ベンガルール間500キロを結ぶ産業回廊の建設も加えられました。2017年には訪印した安倍総理とモディ首相との間で、ムン

バイ・アーメダバード間500キロにわたり日本の新幹線方式による高速鉄道建設プロジェクトの起工式が行われました。インド各地において日本企業進出用の工業団地がたくさん建設され、今や進出日本企業は1350社を優に超えました。インドの中で遅れていたアッサムなど北東部7州をインド主要部と結ぶ道路網などの建設も始まりました。この回廊がミャンマーにつながれば、インドとアセアン諸国との関係が進展し、アセアンと関係の深い日本も大いに裨益するでしょう。

さらに最近では、わが国が音頭を取ったインド・太平洋戦略が、インドのみならず米国、豪州、アフリカ諸国にも支持され、太平洋地域とアフリカを結ぶ協力の糸が太くなりました。

しかしながら、日印間の人的交流はまだ不十分です。例えばわが国への留学生数を比べると、インド人留学生が1188人、中国人留学生が115,278人（2016年、日本法務省統計）であり、100倍近くの差がありました。わが国のインドと中国への留学生数を比べれば、100倍以上の差があると感じます。安倍・モディ両首相間では、日本とインドとの間の留学生や青少年交流、インドにおける日本語教育の振興、双方向での観光振興なども具体的な数字や計画を伴って合意されましたので、今後は改善されることを期待しています。

日本インド学生会議での経験は、学生諸君にとって貴重なものであり、今後の長い人生において大いに役に立つものと確信いたします。卒業後もそれぞれの道において、ますます重要性を増す日印関係に貢献していただくことを期待しております。

日本語会話協会チーフパトロン 二ガム和子先生

今年は23回目の会議です。毎年毎年準備期間の時、何か問題があり心配することが多くありますがいつものように今年も大成功の元、幕を閉じ参加者の心の奥深く残る会議になったと思います。今回の参加者の年齢が23歳前後なのでこの学生達が生まれた頃この会議が始まりました。それで参加者と同じようにこの会議も一人前の大人になったかと思われれます。

コルカタの参加者に何が一番心に残ったかと聞きました。日本料理を作ったこと、秋葉原、オリンピックセンター、日本の交通機関、浅草で仲間とはぐれた時知らない日本人に親切にしてもらったこと、日本の生活が便利なことなどいろいろありましたが皆が口を合わせて言ったことは「絶対また日本に行きたい。今度は働いて自分のお金をためて行きたい」ということでした。

日本語会話協会のチーフパトロンとしてもっともっと多くの人にこんな素晴らしい経験をさせてあげたいと思います。日本側のメンバーの皆様、長浜先生お疲れ様でした。お世話になってありがとうございました。来年はコルカタでお会いしましょう。

第23期 日本インド学生会議実行委員 御中

今年は日本に西ベンガル州コルカタより8名のインド人大学学部生を8月13日～22日 東京にお迎えして無事交流が終了されましたこと、お慶び申し上げます。明日を担う日印の大学生の皆様の交流に際し、以下の通り2日間に亘り楽しくご一緒出来ましたのでご報告致します。

●8月18日（日）午前インド独立の闘士スパス・チャンドラ・ボースの命日を迎え、東京・杉並区の日蓮宗・頂光山蓮光寺で75回忌の法要が営まれ、この英雄の御霊にご参拝し日印交流の一つの歴史を勉強した。

●8月21日（水）午前東大本郷キャンパスにお迎えして、総合図書館でタゴール翁肖像画を見学。1916年6月1日タゴール翁は東大訪問。「Message of India to Japan」と題するご講演をされた。この講演を記念して、1957年10月インド初代ネルー首相が東大訪問のお土産として寄贈されたのがこの肖像画。見学後、山上会館にて東大インド人留学生2名（学部PEAK 3年生Mr. Abhishek Gupta及び理学系卓越大学院GSGC修士2年Mr. Kunal Kumar）と日本人公共政策大学院修士2年生近藤翔太君1名の計3名の学生による東大学科紹介や留学体験談、そして小職通算20年（三菱商事13年+東大7年）の印度駐在経験を通じた日印交流体験談も交え、夢ある日本留学と日本での就職についてご説明した。

思い出の写真を以下添付します。

タゴール翁肖像画
東大総合図書館所蔵
同図書館HPより引用



8月18日蓮光寺前庭にあるボーズ記念像にて8人のインド人大学生記念写真



8月21日東大本郷キャンパス三四郎池にてインド人大学生と実行委員の記念写真

★インド人大学生8人：Ms. Anusha Banerjee Mr. Deepto Banerjee,
Mr. Ptatyay Kumar Mullick Ms. Ratula Datta, Mr. Koyel Mukherjee,
Mr. Tuneer Chakrabarty, Ms. Subohjeet Mookkherjee Ms. Rupkatha Majumder

★実行委員5人：望月晴仁委員長、秋田朱音副委員長、大塚圭華委員、有木ひろむ委員、
近藤翔太委員

最後に、関係者の皆様の今後益々のご健勝・ご多幸をお祈り申し上げます。

敬具

日本インド学生会議顧問 国際基督教大学上級准教授 近藤正規先生

第23期学生会議のご成功をお祝いいたします。今年度は日本開催でしたが、インド人と日本人が一緒になって、普段私も気がつかないような日本の魅力を堪能して友好を深め、本会議の場もお互いの国について知る貴重な機会でありました。

日印関係がこれまでにない盛り上がりを見せている中、両国のメンバーは今後の両国にとっての大きな資産となります。今後とも皆さんの一層のご活躍を祈念いたします。

日本インド学生会議創設者 長浜浩子先生

23期の日本開催、お疲れ様でした。少人数メンバーでの活動でしたので、開催中は大変だったことと思います。23期は本来でしたらインド開催の年でしたが、2020年がオリンピックという事情を考慮して22期の強い希望で日本開催となりました。

日本開催はインド開催に比べ参加者が少ないのは23期に限ってのことではありませんが、来日したインド側学生をおもてなしする体験は人生の歩みの中で役に立つことを学ぶ大変良い機会となりますので、その点で残念に思っております。日本開催とインド開催の両方に参加することは、おもてなしする側とおもてなしされる側の双方に理解が届く人を育てることになりますのは申すまでもありません。

近年、学生を取り巻く環境も大きく変わり、インターンシップを始めとする海外でのプログラムなどJISC創設当時とはかなりの変化があり、限られた期間内に、どんな体験活動を選ぶかの選択肢は年々増え続けている方向のようです。

そのような中でJISCを選ぶに至るには、活動内容と参加に必要な費用などの条件も含めて決定することとなるのですが、費用を参加する本人が負担することは、取り組みの姿勢を向上させることにつながるとも感じています。それは、参加費用にみあう以上の質の高さを求めることになり、身についたら生涯にわたり失うことのない生きるための知恵袋の中身を充実させることにもなります。

JISCは学生主体の活動で歩を続けており、每期財団からの助成をいただけますことは活動の大きな支えとなっております。その感謝の気持ちは活動内容を向上させるための力となります。今期も助成の対象としてJISCの活動を採用してくださいました三菱UFJ国際財団・双日国際交流財団皆様に感謝申し上げます。また、今期日本開催では日印協会の月間インド送付の際に封入させていただきました

チラシにより、個人協賛というかたちで協力をいただくことができました。ご賛同いただき活動を支えて下さった皆様に、心よりお礼申し上げます。活動から得られたことは、この活動報告書に残して個人・仲間の思い出とするだけではなく、読んでくださった方の心に新たな世界が広がるようなかたちで届き、何にも代え難いお礼となれば嬉しい限りです。また、文字や写真で終わらせるのではなく、広く人のために役に立つ行動につなげてほしいと願っております。

各期の横のつながりとOBOGとの縦のつながりがJISCが未来に向けての力につながることを期待しながら、23年の月日が流れました。日本インド学生会議は、多くの皆様に育てていただいたことを忘れてはいけません。

ここ数年、社会の現状として、顔を会わせて話すことが少なくなっていると感じることが多くなりました。向かい合っているのは、いつもスマホという方も世の中には少なくありませんし、友人知人との会話も短いメールでというのが日常的になっている方もおいでです。また、手紙を書くことも少なくなり、切手を貼る位置が分からないことにまでなっている現実もあり、教育の現場での困り事となっていることをテレビのニュースが伝えていました。

日本インド学生会議の活動と重ねてみますと、わざわざインドへ行ってインド側の学生さんと意見交換をすることをJISCの中心的活動としていますが、活動の考え方に変化を感じることが時折あります。日本インド学生会議はインドの学生対日本の学生の対話を活動目的として誕生しているところが他の交流団体と大きく違うところであり、活動が続く限り大切にすべきこととなっています。

一見、メールやパソコンでの検索などでも十分と言いきれるようなことであっても、メールを介してのやりとりから生まれる誤解は少なくありません。顔を合わせることから始まる人をより良くすることは、便利になり過ぎた今の時代だからこそ必要だと思います。集まらなくてもできるかもしれないことを、わざわざインド・日本へ出向いて、パソコンだけでは見つけられない、大切な宝物を見つけてほしいと思います。そして、その宝物を生涯心に置いて様々に役立てられれば、そのように思います。

インドをより多く知ることは大切なことですが、人と人との間で得られたものはそれ以上に大切で、パソコンの前に座って得ることとの違いに気付いてほしいと思います。インドには、日本語学習者も数多くおいでです。特に日本語は、文化と連動しているところが多く、時として日本人以上に日本人と思うインドの方に出会うことがあります。その出会いは、日本人としての自分の在り方を振り返る機会を得る貴重なことと実感できることとなります。これからも、御協力者が費やしてくださっている目に見えない多くの時間とお心遣いに感謝しながら、金銭に代えることのできない体験・学びの機会がJISCの活動によって継続されることを願っています。

末筆となってしまいましたが、表敬訪問をさせていただきましたサンジェイ・クマール・ヴァルマ駐日本インド大使閣下を始めとする在日本インド大使館の皆様、理事長平林博様を始めとする日印協会の皆様、インド大使館より開会式にご出席くださいましたVCC所長シッダルト・シン教授、和服着付け体験ボランティアでご協力くださった北爪裕子(ひろこ)様、東京大学シニアアドバイザー吉野宏様、事情により実現とはなりませんでした但しホームステイの受け入れに最初にお申し出をくださった吉岡二葉様とご家族の皆様、コルカタ学生メンバー来日のために多くのご尽力を下さったニガム和子先生を始めとする日本語会話協会の皆様、開会式にてご挨拶を下さった秦 智(はた さとし)先生、開会式にボラ

ンティアで演奏下さった津軽三味線の清水まなみ様、ホームビジットでお世話になりました皆様、そして23期日本開催をお手伝い下さった応援学生の皆様、JISC顧問の近藤正規先生、活動にご協力くださいました全ての皆様に心よりお礼申し上げます。そして、23期までJISCの活動をつないでくださった全てのOBOGに感謝です。24期も、よろしく願いいたします。

日本インド学生会議OB・OG会 会長 鈴木祐輔様

今年もインドから8名の学生を日本へ迎え、第23回日本インド学生会議を開催することができました。インドの学生の皆さんは、日本に来るために多くの準備と決断をされたことと思います。日本での一つ一つの出来事を大切に、ぜひ今後活かしていただきたいと思っています。日本の学生の皆さんは、インドから来る学生の皆さんを迎え、一緒に過ごし、多くを感じ、学び、また日本を改めて知る機会にもなったと思います。

多くの皆様からさまざまな形で、ご協力をいただき、開催することができたこと嬉しく思います。私にとってインドの学生と過ごし、話した経験は、いつまでもものごとを考える原点になっています。これからも日本インド学生会議へのご理解とご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

日本インド学生会議創設者 後藤千枝様

第23期、日本インド学生会議、日本での本会議が無事修了したとの報告を受け、とても感慨深く目頭が熱くなりました。長年の友人である石津達也さんから日本インド学生会議設立の誘いを受け、その後、長浜浩子さんを石津さんに紹介させていただき、日本インド学生会議発足の準備のために3人でインド入りしたことが走馬灯のように蘇ってきます。そして、数多くの学生会議の産みの親である石津さんは、一昨年、天に召されていきました。石津さんは、生前、マザーテレサの精神を未来を担う日本とインドの学生たちと共有したいと事あるごとに言っていました。また、身分を超えて対話の大切さにも触れていました。

そもそも、マザーテレサの精神とは一体、何でしょうか。私の解釈ですが、一言でいうと、無条件の愛であり、許し、異を受け入れて共存することではないでしょうか。それはエゴとは無縁で、愛と光がベース。このことは、身分を超えて、人類愛や慈悲の心での言動にもつながっていきます。

生きている中で一番大切なことは、自らの心の声に耳を傾け、内なる声に従うことだと思います。愛と光をベースに、心の目で物事を見たり感じたり、判断することにより、自ずと真(まこと)の道が示されていくと思います。心の奥底には、無限大の創造性、可能性、愛と光の源泉が広がっているからです。価値観や意見が異なる人々と共存することは容易ではありません。そんな時には、肉体を纏った3次元の相手にではなく、究極な手段ですが、相手の魂に直接、語りかけたり祈ったりするのがベストかもしれません。

御縁あり出会う人々を大事にしてください。誰にでも、愛情を持って接してください。愛と光を放ってください。そして、日本インド学生会議は「学生の学生による国際社会の将来のための会議」。団体の基本理念にもありますが「学生」が主体なのです。今後も規約を基盤に、規約というルールを守りながらも是非、「学生主体」を事前活動・本会議・事後活動、すなわち年間を通しての活動においても終始貫いてください。言い換えれば、現役実行委員学生たちの意見や思いが何より一番尊重され「学生主体」であることが保証されています。「学生」である特権を思う存分活用し、どんどん自由な見地から発言・言動・活動して「国際社会の将来のため」に貢献してください。そして、よりよい社会・世界・未来のためにTake Actionし続けてください。

今後も、日本インド学生会議のますますの発展、そして永遠に継続していくことを心から願ってやみません。同時に私たちの仲間であった石津達也さんの御冥府を心からお祈り申し上げます。

3. 【基本理念】

私ども日本インド学生会議は「学生による学生の国際会議」をモットーとして運営されておりま
す。学生自らが積極的に責任をもって活動する過程で、国際社会との関わり方を改め、よりリアル
な社会問題の構図を見据えることができるようにするためにこのような運営方針が取られておりま
す。したがって必然的に事務方の仕事も多く求められることになるのですが、参加者が学生である
以上、学生ならではの想像力は大いに貴重なものであります。創設者の一人でもある故・石津達
也様のそのような想いを背負ったうえ、私たちの具体的な理念・ビジョンにつきましては以下2点の
通りであります。

1. 業界や専門分野の境界を超えた、切実な問題意識を抱えた者同士の話し合いのため

「学生」の最大にして最高の特権は既存の概念や営利関係、特定の政治・宗教にとらわれな
い点にあります。その強みを存分に生かし、自由かつ直接的な討議を通じて世界の諸問題につい
て新たな意見、解決策、視点、側面を導き出したうえ、私たちが目指すのはそれらを社会に報告・
提案することです。学生という社会的、営業的、政治的な縛りとは無関係な立場を生かして、専門
家やビジネスマン、政治家ではないため大きなインパクトを施すことは難しいものの、誰かしらの
心、引いては世界観を変えてしまう程の影響力を作り出すことも可能なのです。

そのため各々の学生が抱えている悩み、問題意識に対して正直に向き合います。環境問題、内
戦、経済摩擦、人権侵害、人種差別など多くの複雑化、泥沼化している問題。それらの問題をひと
つひとつ紐解き、それぞれの問題を直視する姿勢を当学生会議で養うことのできる輪をプレゼン
致します。

しかし、これらの問題を解決する手掛かりは多くの場合、学術的な討論によって導き出されるも
のではなく、我々の生活の奥深い部分まで根を張った葛藤や衝突を汲み取ることによって観えて
くるものであります。上記のような問題を解決するには、多様な社会、文化、価値観、考え方など
についての認識および理解を兼ね備えていなければなりません。そこで、当団体は「日本とイン
ドの学生による会議」というかたちで、解決の道を模索していきたいと考えています。

2. インドというインク्रेディブルな国を言い訳にしたインク्रेディブルな成長のため

「なぜインドなのでしょう」と、いう声を聞きます。一昔前まで、インドが好きな人たちは比較的物
好きで特殊な人が多い印象が強くありました。しかし、そのような印象はとうに古いものになっ
たのではないのでしょうか。人口の多さや数学、論理的思考の能力の高さ云々のまえに、複雑に民
族・宗教が絡み合い、他に類を見ない多様性に富んだ国であるが故に、身に着くのであろう彼ら、
彼女らのバイタリティー（活力）や元気さには底知れないものがあると言っても良いでしょう。力強く、
かつたくましい気概を身に着けたい方にはインドをお勧めします。

以上の2点を軸とした活動を通じて個々人が成長するのはもちろんのこと、これらを何らかのか
たちで社会に報告することによって、唯一無二の学生になることができるでしょう。そしてそれが最
最終的に国際社会に貢献することに繋がって実るのでしょう。また、当団体は社会からの助成・支援
を受けて活動しているという自分たちの「パブリック性」を認識し、社会還元への模索を続けていき
ます。

4. 【団体概要】

前ページの「基本理念」の実現に向かって、日本インド学生会議は、年間を通して活動しております。メンバーの参加資格は「学生」（大学、短期大学、専門学校）であり、活動は全て学生の手で運営されています。

私どもの基本的な1年間の活動は、「準備活動（組織運営、勉強会、先遣隊、合宿など）」→「本会議開催」→「報告書編集・報告会開催」→「社会還元活動」という流れを軸としています。そして、これらの活動の中心となるのは、通常活動として週1回開かれる定例ミーティングです。定例ミーティングでは、委員全体で審議すべき事項や、以下の各担当局からの報告など会議運営に必要な連絡などを行います。

また、学術局を中心にインドに関する知識や分科会で必要とされる体系的な知識を身につけるための「勉強会」の開催も行っています。その他、定期的に機関紙の発行やホームページの更新、専門家を招いての「講演会」や「インド映画鑑賞会」「新勧説明会」など各種イベントの開催などを行い、一人でも多くの方に日本インド学生会議を知っていただくよう努力しています。また、社会と接点を持って活動していくために、財団や企業、その他国際交流団体などへ積極的に渉外活動をしております。

名称	日本インド学生会議（英語名 Japan India Student Conference）
設立記念	1996年8月
創設発起人	石津達也、長浜浩子、後藤千枝
顧問	近藤正規
組織構成	実行委員会、OBOG 会、創設発起人（3名）、顧問（1名）
実行委員会	参加資格は大学、大学院、短期大学、専門学校に所属する学生
協力団体	インド側カウンターパート（コルカタ、チェンナイ）
団体目的	日本とインドの学生同士の討議や交流を通じて、国際社会に広がる多様性に関心を持ってくれること。お互いの社会、文化、価値観などを理解し合うことの楽しさを学ぶこと。そしてインドを始めとする南アジアの国々と日本を結びつけてくれる人材を育成すること。
活動概要	事前活動、組織運営、勉強会、本会議、学生同士のディスカッション、ホームステイ、フィールドワーク、文化交流 （本会議は毎年日本とインドいずれかの国で開催される）
事後活動	報告書作成、報告会開催、次期実行委員募集週に1度定例ミーティングを行う。
発行物	機関誌、活動報告書、広報活動

広報	Homepage: https://japan-india.wixsite.com/jisc Twitter:JapanIndia22 Facebook: https://www.facebook.com/jisc1997/ Instagram:japanindiastudentconference
----	---



5. 【第23期日本インド学生会議実行委員会メンバー名簿】

・委員長/財務

望月 晴仁（獨協大学外国語学部既卒）

・副委員長/広報

秋田 朱音（愛知県立大学外国語学部4年）

・渉外局

大塚 圭華（東京外国語大学国際社会学部4年）

・学術企画局

陳 映桐（東京外国語大学言語文化学部3年）

近藤 翔太（東京大学大学院公共政策学教育部修士2年）

・広報局

中村 美奈穂（獨協大学外国語学部4年）

・当日協力者

有木 ひろむ（神田外語大学外国語学部2年）

塩崎 美央（成城大学4年）

6. 【第23期コルカタ側メンバー名簿】

- President

Anusha Banerjee (Applied Geology Masters 1st at Presidency University)

- International Communicater

Deepro Banerjee (Electronics and Communication Engineering Bachelor's 2nd at Meghnad Saha Institute of Technology)

- Academic Bureau

Pratyay Kumar Mullick (Computer Science Bachelor's 3rd at University of Engineering and Management)

Ratula Datta (Law Completed Bachelor's 3rd at Amity University)

- Cultural Bureau

Koyel Mukherjee (Linguistics Masters 1st at Jadavpur University)

Rupkatha Majumder (Economics Bachelor' s 3rd at Jadavpur University)

- Project Bureau

Tuneer Chakrabarti (Sociology Bachelor' s 1st at Presidency University)

Subhojeet Mookherjee (Law Bachelor' s 3rd South Calcutta Law College)

7. 事業計画

23期日本インド学生会議予定表

日程：2019年8月13日～8月22日

場所：日本、東京近郊

参加人数：インド側学生8名、日本側実行委員（各日6～9名）

	午前	午後
13日（火）	羽田空港 お出迎え	大江戸温泉物語
14日（水）	分科会①、開会式準備	開会式、文化体験
15日（木）	歌舞伎、回転寿司	ドン・キホーテ、ダイソーなどで買い物
16日（金）	インド大使表敬訪問	分科会②
17日（土）	ホームビジット	
18日（日）	蓮光寺にてチャンドラ・ボース75回忌	自由観光（新宿など）
19日（月）	材料調達、調理実習	分科会③
20日（火）	浅草観光	秋葉原観光
21日（水）	東京大学訪問	着物着付け（北爪様宅）
22日（木）	自由観光（国会議事堂、御苑など）	お見送り

8. 【本会議日録】

◇2019年8月13日（火） 晴れ時々雨

午前	空港送迎→オリセン荷物預け
午後	大江戸温泉物語（@お台場）

朝の7:30、インド人8名をを空港にて日本人3人で迎える。1年ぶりの再会になかば照れくさい様子を見せていた。合流できた後はオリンピックセンターへ荷物を預けに向かう。その前に配付されたSuicaカードに各々が1週間分の交通費をチャージ。はじめての体験にもかかわらず一行は上手くことの運びを瞬時に理解するも、改札でSuicaの使い方を教えることから始まり、少々ドタバタ。

前日、シンガポール空港にて空港泊をしていたインド人たちは既に疲れきっていた。大きな荷物を片手に乗った朝の電車は通勤者が多く、いっぱいいっぱいの様子。それでもせっかく朝についたので、一日を無駄にしたいくはない。ということで身体を癒やしつつ今日から10日間活動する舞台となる「東京」を知るにあたっての始まりとして、江戸の街並みを再現した日本一大きい温泉のテーマパークである大江戸温泉物語へと足を運ぶ。

インドには「風呂」でも裸のからだを公に晒すことはない。いままで見たことのないほどの裸体の数々を前にたじたじとなったインド人たちは、シャワーを浴びたあと出口のほうで何か話し合いをはじめ。一同はなかなか気持ちの整理ができないのか、我慢できず、インド人は立ち上がったのだろう。しかし観念したのか、浴槽へと戻る。大江戸温泉では他の国の人々も多くが入浴していたためインド人にとっても入りやすかったのではないだろうか。

入浴をしたのち、江戸の街並みを浴衣に身をまといながら堪能した。テーマパーク越後谷で種類豊富な浴衣や帯から自分にぴったりの衣装を選び、身づくろいをするのもひと手間かかったが、元祖温泉テーマパークを満喫。「馬と魚」や「あきら」などの人気お笑い芸人も追加料金なしで観賞でき、アレンジが加えられた星野源の『恋』も聞けて、日本のお笑い劇場の雰囲気存分に味わうことができた。楽しさと共に心配をよそに、「日本」で長旅の疲れをも忘れさせられる一日となったのかと思う。



◇2019年8月14日（水）雨時々くもり

午前	分科会①→開会式準備（@オリセン）
午後	開会式→懇親会（書道教室、三味線体験）→明治神宮参拝

本日は開会式。4月から準備してきた本会議が本日幕開ける。各々会議にむけての想いを胸にセンター棟5階の404室へと向かう。開会式には様々な来賓の方々をお呼びし、貴重なお言葉をいただいた。今年度は4月から5カ月かけて本会議に向けて準備してきたが、当本会議に出席するにあたって求められる姿勢および期待される成果を各々再確認していた。

開会式は文化プログラムとして、インド人学生による「ロビンドロ・シヨンギット」（タゴール翁の歌）が披露された。

日本人学生による津軽三味線のパフォーマンスが披露された。イベントの最後には書道ワークショップと清水まなみ氏によるご厚意により津軽三味線体験をさせていただいた。所説はあるが、良質の津軽三味線の多くはインドの高級木材である「紅木」からできているということで、一同インドの有り難みを感じた。

その後は来賓の方々を代表して、インド大使館ヴィヴェーカーナンド文化センター所長のシッダールタ・シンさんに貴重な挨拶を頂き、インド側参加者と日本側参加者の気を引き締めていただいた。最後にはバンガロール大学で日本語教師として働いた経験をお持ちで、その後インド界限で様々な活動を積極的におこなわれている秦智先生と日本インド学生会議の発起人のひとりである長浜浩子先生によりあたたかいお言葉を頂戴した。

開会式にはOBOGや日本インド学生会議に興味をお持ちの学生を中心に出席。お盆の雨上がりの日に来場して頂いたお礼に、出し物を中心に開会式プログラムを組んだ。



◇2019年8月15日（木） 晴れ時々雨（台風の影響）

午前	歌舞伎鑑賞
午後	買い物（ドン・キホーテ、世界堂）、プリクラ体験

午前11時開演の歌舞伎を観劇するため10時前に当日券販売の列に並んだが、すでに長蛇の列ができており、立見席の案内だった。この日観劇したのは八月納涼歌舞伎第一部「伽羅先代萩（めいぼくせんはいはぎ）」。江戸時代に起こった大名家のお家騒動を題材とした時代物の大作だ。2時間にわたる公演の途中、インド人メンバーは疲れて座り込んでしまったりもしたが、翻訳機なしでも内容をしっかり理解し、大いに楽しんでた。また、初めて生で見る日本の伝統芸能・歌舞伎と会場の独特な雰囲気感激し、観劇直後も興奮冷めやらぬ様子が見て取れた。最後はお土産コーナーで品物を吟味し、各々買い物を済ませた。

お昼は全員待ちに待った回転寿司に行き、腹いっぱい寿司を頬張った。生魚を始めて食べるメンバーもいたが、みんなどれも「美味しい、美味しい」と言って満面の笑顔で食べていた。その笑顔に大変癒された。インドの日本食、特に寿司は高価であるため、安価な寿司を提供しユニークなサービスを併せ持つ日本の回転寿司屋にたいそう喜んでた。

午後は六郷土手の花火大会に行く予定だったが、残念ながら台風の影響で中止になってしまった。また、雨が降ったりやんだりの天気だったため、屋内活動に変更した。新宿のドン・キホーテや世界堂で買い物をし、ゲームセンターで「プリクラ撮影」という日本の若者文化を体験した。日本の夏の風物詩である花火を見ることはできなかったが、今日はインド人メンバーの夢が沢山叶った良い一日だったと思う。



◇2019年8月16日（金） 晴れ

午前	在日インド大使館表敬訪問
午後	分科会②→渋谷観光

午前中は、日印学生会議メンバー全員で在日インド大使館へ表敬訪問に伺った。そしてサンジェイ・クマール・ヴァルマ駐日インド大使に謁見し、貴重なお言葉を頂いた。お忙しいなか日本インド学生会議メンバーの訪問を快く受けてくださったヴァルマ大使、並びに在日インド大使館の職員の方々へ感謝の意を表したい。大使曰く、日本とインドは歴史的に深いつながりを持ち、近年では経済・安全保障・文化・観光・学問など様々な分野における交流が一層強くなっている。まさに、両国は互いに重要なパートナーである。今後日印双方の関係がさらに発展していくためには、若い世代の力が必要不可欠だと考える。したがって、我々日本インド学生会議が今後も学生同士の腹を割った話し合いや異文化交流を継続し、若年層の「声」や日印の「友情」を絶えず社会に発信していくことが大切だと思った。

午後は、オリンピックセンター内の会議室で分科会を行った。日印学生会議のメンバー以外に日本人学生や在日インド人留学生も参加し、総勢18名で会議に臨んだ。今年の本会議は、「教育」をテーマに設定し、「命の教育」という内容を取り上げた。はじめに全員で動画を視聴し、グループに分かれてその内容に関するディスカッションを行った。またグループごとに出た意見を全体に発表・共有もした。日本人とインド人との間で、共通する考え方もあれば異なる視点からの見方もあり、とても興味深く感じた。参加者全員が積極的に発言し、各々新たな学びや気づきを得られた有意義な時間になったと思う。

オリンピックセンターで夕食をとった後、バスで渋谷観光に出かけた。到着してすぐにハチ公と対面し、インド人メンバーは興奮を隠しきれない様子でカメラのシャッターを切っていた。またスクランブル交差点を何度も往復し、眠らない街・渋谷を動画に収め、また一つ忘れられない思い出ができた。



◇2019年8月17日（土）晴れ

午前	ホームビジット
午後	自由行動

今日はインド人メンバーのホームビジットの日でした。ホームビジットでは、インド人学生が日本人家庭に半日ほど訪問し、文化体験をします。

まず朝に日本側メンバーはオリンピックセンターでホストファミリーがお迎えに来るのを待ちました。ホストファミリーの方が来ると挨拶を交わし、インド人メンバーを見送って午前中は終わりました。

メンバーの中では、ホストファミリーと一緒に浴衣の着付けや茶道体験といった伝統的な体験をした人もいれば、夕食の買い出しやお好み焼きパーティなど、日常の過ごし方を体験したメンバーもいて、様々でした。初めてお会いする方の家に訪問するので、楽しめるか心配でしたが、楽しんでそうでなによりでした。

ホームビジットの終わりの時間がバラバラで、メンバーの中で食べたいものもそれぞれだったので、夕食時間は自由行動にしました。

新宿や秋葉原の夜を散策するメンバーもいたみたいで、この一日は東京を体感することができたのではないかと思います。



◇2019年8月18日（日）晴れ

午前	スバス・チャンドラ・ボース氏忌法要式典
午後	代々木散策

今日はインド独立の父、スバス・チャンドラ・ボース氏の命日ということだったので、午前中は蓮光寺に訪れ、式典に参加しました。インドと言えば、みんなはきっとガンディーと答えるでしょう。しかしチャンドラ・ボースもインド独立を率いた人の1人ですが、チャンドラ・ボースはガンディーの全く違うようなやり方でインド独立を求めました。彼はどちらかというところ、全力な人です。些細な可能性でも諦めず、チャンスがあればすぐに掴みたいような人でした。そんな彼は結果としてファシズムに身を投じていました。チャンドラ・ボースが亡くなった後、遺骨が日本に搬送され、蓮光寺にお墓があります。

式典が終わり、夕方になると私たちは代々木に向かいました。インド人メンバーな楽しみにしていた夏祭りです。もちろん浴衣は着れませんでした。唐揚げやかき氷、盆踊りを鑑賞し、存分に楽しむことができました。そのため、夜のオリセンへの帰り道でも、インド人メンバーたちによる歌声はたえませんでした。



◇2019年8月19日（月）晴れ

午前	調理実習
午後	分科会③

今日の午前は調理実習を行いました。朝の9時、みんなでスーパーへ買い出しに行き、食材を購入しました。照り焼きチキン、炊き込みご飯、豚汁、小松菜のおひたしの計4品の日本食を班に分かれて作ることにしました。はじめて見る「しめじ」や日本の調味料に興味津々のメンバー。みんなで協力し、輪になって食卓を囲みながら食べたおかずは会議中に食したどの食事よりも美味しく感じたかと思えます。

全てを完食し、後片付けを済ませた後の空き時間。近くあった「君の名は」のモデルになった階段に行き、みんなで写真実習を行いました。日本語を勉強している皆は、日本人側参加者よりも日本の映画やアニメによく精通しており、様々なシーンを回想しながら各々面白い写真を撮っていました。また、日本語や日本の文化に関心を持っていた彼ら・彼女らは「これはどういう意味ですか?」「日本語で何と言いますか?」と、質問を飛び交わせ、交流を積極的にとっていました。

午後は、第二回目の分科会。前回ビデオで観た「命の授業」について、賛成反対派で分かれて意見をシェアし、ディスカッションをしました。賛成派は、日常では見られない光景を知ることによって命の大切さを学ぶことができる他、人から聞いた話ではなく実体験を通して、最近社会問題として取り上げられている妊娠中絶やいじめによる自殺などの抑制につながるのではないかという意見が挙がっていました。一方、反対派は、愛情を持って育てたのに、最終的に自分の手で殺してしまうのは裏切り行為であるといった意見が挙がるなど、多角的な視点から命の授業について議論することができたと感じました。



◇2019年8月20日（火）晴れ

午前	浅草観光
午後	秋葉原観光

午前中は浅草をみんなで観光し、インド人にとっては日本らしさを象徴したものに触れることができた時間であった。はじめに雷門を前にしてその大きさに心を打たれた者が多かった。それからおみくじを引いたり、ベビーカステラなどの浅草ならではの食べ物を堪能した。全てが体験したことないことだらけだったようで、自由時間を設けたあと合流したら表情が明るく、浅草観光は満足のように見えた。

午後からは秋葉原を散策した。アニメや漫画など海外で人気を誇る日本の文化を肌で体感することができただろう。人によっては秋葉原に行くことが夢であった人もいて期待している人が多かった。はじめにみんなでbook offに行き、漫画やゲームなど種類の多さに圧倒されていて、欲しかったものを見つけられた時には嬉しそうな顔をしていてこちら側も行って良かったと思えた。次にフィギュアを見に行き、その精密さを直接見ることができて驚いていて、買った者もいて嬉しそうだった。自由時間を設け、それぞれが秋葉原で夢のような時間を過ごしたあとに思いがけない幸運に巡り合った。インド人みんなが知っていた人気YouTuberに偶然遭遇したのだ。みんな驚いていて、一緒に写真を撮ることもでき、秋葉原で過ごした時間は忘れられないものになっただろう。

最後にお酒を飲み、日本のビールや日本酒などインドでは飲めないものを飲んだ。瓶ビールでそれぞれのコップに注ぎ日本でのお酒の飲み方も体験でき、みんなで楽しく飲むことができた。

これで1日が終了したが、数少ない日本での生活の中で多くのことを経験できた1日になっただろう。



◇2019年8月21日（水） 曇り時々雨

午前	東京大学本郷キャンパス訪問
午後	上野散策、着物着付け体験

眠い目をこすりながら、午前10時に東京大学本郷キャンパス赤門前に集合した。東京大学社会連携本部渉外部門インドシニアアドバイザーの吉野宏さんのご厚意で、キャンパス案内をしていただいた。日本最高峰の大学ということで、インド人メンバーは真剣に吉野さんの説明を聞き、歴史ある建造物の写真を撮っていた。ひと通り見学が終わった後、会議室に移動し、現役東京大学院生2名（日本人・インド人）と学部生1名（インド人）による東大の授業や学生生活に関するプレゼンテーションと吉野さんによる東大留学プロモーションがあった。インド人メンバーの中には日本留学を視野に入れている者もいるため、有益な情報を得られたことであろう。お昼はそのまま学食を食べ、生協で東大グッズを購入した。

大学訪問後、徒歩で上野に向かった。不忍池・上野恩賜公園を歩いてアメ横商店街周辺を散策し、日本の下町の雰囲気やインド人メンバーに堪能してもらった。みんな軒並み連なる激安店に驚きながらも、買い物や食べ歩きを楽しんでいた。

上野散策を終えた後、外部協力者の北爪裕子さんのお宅で着物の着付け体験をした。今回日本インド学生会議のために、御自宅や着物の提供並びに着付け・ヘアセットなどすべてをしていただいた北爪さんには頭が上がらない。最初はメンバー一同疲れた表情を浮かべていたが、素敵な着物を身にまとった瞬間目に輝きを取り戻した。お家の中には、日本刀や和傘、茶道セットなどの小道具が用意されており、写真撮影大会が始まった。みんなしっかりポーズを決めて、まるで本物のモデルのような写真を沢山カメラの中に収めることができた。

日本の教育機関と「和」を体験した充実した一日だった。



◇2019年8月22日（木）晴れ

午前	各自散策
午後	ピクニック@新宿御苑、参加証授与、空港送迎

いよいよ最終日。10日間お世話になったオリンピックセンターを旅立つ日がやってきました。荷造りを済ませ、最後の朝食を食べた後、午前は国会議事堂やドン・キホーテで最後の買い物、東京都庁など、それぞれが最後に行きたい場所へ向かいました。私は、東京都庁と一緒に向かいましたが、展望台から見る景色はとても綺麗でみんな見入って眺めていました。皆で東京タワーやスカイツリーを探したり、スタンプを押したり、楽しんだ後は、最後のお昼ごはん。食べてみたいリストに挙げていた「たこ焼き」を食べたいという声が集まったので、近くのたこ焼き屋さんへ。みんな「おいしい」と言いながら、熱々のたこ焼きを頬張っていました。午後は、新宿御苑で全員揃ってピクニック。シャボン玉やトランプをして遊んだり、散策したり、お菓子を食べながらゆっくりと過ごしました。みんなに一番印象に残っていることを聞いてみると、「ありすぎて決められない」という意見が多く挙がり、短期間の滞在だったけれど、きっと沢山のことを感じ取ってもらえたのかなと思い、嬉しく感じました。そして、楽しい時間はあっという間に過ぎ、いよいよ羽田空港へ。チェックインを済ませ、終了証と日本人メンバーからの手作り写真立てのプレゼント。毎日一緒に過ごしていたインド人メンバーとの別れに、搭乗時間のギリギリまで別れを惜しみながら、共に時間を過ごしました。彼らと過ごした10日間は毎日が濃くて、新鮮で、忘れられない日々となりました。「また会おうね」そう言って最後に撮った集合写真はお気に入りの一枚です。



9. 【分科会】

事前学習

【第一回目・第二回目：道德教育の担い手は学校か家庭か】

文部科学省は教育の基本に「生きる力の育成」を掲げ、具体的な能力の一つに「他人を思いやる心」を挙げている[1]。我が国は伝統的に道德教育に注力してきており、生徒には学校生活を通じて、道德心を育むことが期待されてきた[2]。

一方、海外に目を向ければ、道德教育は学校ではなく家庭に任されていることが多い。例えば、モディ首相は「道德教育や規律について日本から学ぶ必要がある」と述べたが、多様な人種や文化を持つインドでは、教育においても均一性以上に多様性が尊重されている[3]。インド政治に関する研究で著名なS・パルシカル（プネー大学元教授）も国家がどのように構成され、どのように統治されるべきかという点について、インドの人びとの間に多数派主義（majoritarianism）的かつ宗教的傾向（religioisty）を有するようになり、自らが所属する集団と他の集団との違い（group boundaries）を強く意識するようになったという。[4]

しかし、インド（コルカタ）ではかつて「画一的」とも言える教育が施されていた、という証言がある。2001年次の日本インド学生会議活動報告書には、校則について「生徒はきちんと守って生活している。学校は集団教育の場。集団教育の場である以上校則を作り、それを守ることは当然のこと。生徒たちもそれは分かっているはず」（2001, p.120）、と書かれていた。が、2019年現在ではどうなのだろうか。「世界最大の民主主義国」というキャッチフレーズを耳にすることがよくある。そのため、特定の価値観を押し付けかねない道德教育が敬遠され、家庭が道德教育の場となっている、と言えるのかもしれない[5]。

近年になってインドの教育現場でも「心の教育」の重要性が認識され、「Happiness」と呼ばれる新しい取り組みが実施されるようになった[6]。これは瞑想や読み聞かせを通じて心の知能指数を高めることを目的にした教育である。このように、個人の能力向上に特化した教育を展開してきたインドにおいても、精神的成熟を目指す教育を取り入れようとする潮流がある。

第一回目・二回目分科会では道德教育を「学校」と「家庭」の点に着目した日本とインドの違いについて考察をする。

【第三回目：享樂にこそ道徳的規律の秘密が】

泰明小学校を訪問したモディ首相や他の国の方々が日本を訪れるとき、しばしば「規律 (discipline)」や「道徳教育 (moral education)」に関心を持たれることが多い。ところが既に多くの方が確信しているところ、日本の「道徳教育」を他国で導入しても、多くの場合日本人に芽生えるような規律正しい性格が身に着けられるわけではない。また、日本の教育は、愛国心など国民意識を育成することで、多様な価値観を画一化し、反発が起こらないようとしている側面も指摘されており、このことから教育政策は時に、同化や排除をもたらす得るものであることが分かる。(沼田, 2009) [7]すなわち、多くの場合、その国の人々にあった「教育」のかたちがあるはずであり、日本の教育は一事例として提示するだけにとどめ、お互いの教育観を擦り合わせたうえで新しい教育のかたちを模索していったほうがいいのだろう。

そこで、我が国は「運動会ワールドキャラバン」プロジェクトを実施し[8]、インドにおける道徳教育拡充に貢献している[9]。とすると、「運動会ワールドキャラバン」プロジェクトのような活動はどのような意義が見出せるのだろうか。ここで戦後の日本人の気質や行動について研究したアメリカの文化人類学者であるルース・ベネディクトの考察を参考にしたい。彼は以下のように述べている。「日本人は、義務を学習するのと同じ要領で享樂を学習するのである」[10]、と。なるほど、生活のさまざまな場面で重んじられている「規律」はあそびの場面においても通ずるものであり、決して「生きづらさ」だけを助長するものではないのかもしれない。「遊び心の教育」こそ、説教臭そうなイメージがある「道徳教育」も教室で行えうる、秘密なのかもしれない。

第三回目・四回目分科会では日常生活にみられる「あそび」と「規律」が曖昧化されている現象において考察をする。

【最終回：まとめ】

今年度の分科会では教育の行政的な側面の考察は致しません。学生の情報収集能力では全体像が把握できない上、1週間の滞在期間内で新発見を盛り込んだ「提案書」を作成することは不可能に近いからです。確かにGDPの3%しか教育に充てていないという現政権に物申したくなる気持ちは分らなくもない。[11]しかし、其々が自身の体験を中心に議論を展開することで、より質は深い意見交換ができることであり、バックグラウンドを異にする参加者の誰しもが平等に向き合え、馴染み深いテーマ。それこそが「教育」[12]だと考えました。日本における国際教育について関心を持つ参加者や、将来的に日本で学位を取得したいと考えている参加者も数名おり、互いに意見を共有しながら、自分自身のキャリアに影響を与える実りのある分科会にしたいと考える。

なお、インド人は底知れずに優しく、仲間おもいであり、明るい。その様な性格は時に生活を共にする際、思わぬ軋轢を日本人とのあいだに生みうる。「たのしさ」に規律を求める日本人と、必ずしもそうではなさそうに思えるインド人が東京で、ともに様々な行動を共にした後、お互いのことについてどのように感じるのか。これこそが「異文化理解」のひとつの挑戦であると感じる。

日本とインドの教育観の違いについて、「遊び心」の点に着目した時どのような違いがあったのだろうか。参加者学生がまとめた意見・考察をもって、インドに通ずる吉野宏様や小松教授のご意見を頂戴する。

設問リスト

→過去の先輩方が行ってきた「教育」にまつわる設問

- ・何のために勉強するのか。(2001, p. 123)
- ・学校にいけない貧しい子供たちを政府などが支援することについてどう思うか。(2001, p. 123)
- ・生徒にとって先生はどういう人か。(2001, p. 121)
- ・学校は楽しいか。(2001, p. 121)

→今期の参加者の「教育」にまつわる設問

【前半】

- ・「義理」についての説明は難しい。日本の心情を理解している専門家に英語で日本人の心情を教えていただくと良い学びになる。
- ・集団生活は大変？学校ではどのように意識付けされているの？
- ・学校には尊敬すべき人はいるか？
- ・学校における「しつけ」はどのようにするの？
- ・学校と家族の関係は？
- ・三者面談とか学校訪問とか公開授業とかはあるの？

【後半】

- ・運動会・文化祭などの学校行事における気づきはあるか？
- ・諸外国において日本の部活動はどのように映っているのか？
- ・なぜ日本人はモノマネをしたがるの？

[1] 文部科学省「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/attach/1309593.htm

[2] Tokyo Business Today 「What American Schools Can Learn from Japanese Moral Education in Schools」 <https://toyokeizai.net/articles/-/167166>（最終検索日：2019年7月24日）

[3] THE HINDU 「Modifor emulating Japan' s education system」 <https://www.thehindu.com/news/national/modi-for-emulating-japans-education-system/article6370833.ece>（最終検索日：2019年7月24日）

[4] 三輪博樹「インドにおける第17次連邦下院選挙の結果と今後の見通し」 <https://mail.google.com/mail/u/1/#search/%E6%97%A5%E5%8D%B0/FMfcgxwChSPTfWVbBVqHF1CCnQQvHDfp?projector=1&messagePartId=0.1> p. 6-7

[5] C. Seshadri (2006) 「Moral Education in India」, 『Journal of Moral Education』 p. 7-13

[6] CNN 「The latent class on the Indian curriculum : Happiness」

<https://edition.cnn.com/2018/07/18/health/india-delhi-happiness-classes-intl/index.html>（最終検索日：2019年7月24日）

[7] 沼田潤（2009）『日本の教育政策における異文化理解教育の位置づけ—問題点と今後の方向性に関する一考察』 p. 193-p. 225

[8] 文部科学省「日本型教育の海外展開推進事業について」

https://www.eduport.mext.go.jp/pdf/summary/subcommittee/20190131/20190131_2.pdf

[9] 同プロジェクトの目的の一つとして、人種、宗教、社会・経済的地位、イデオロギー、国籍等の違いを超越し、人々の絆を深めることで、活気にあふれたコミュニティを創造することを掲げている。日本人にとって運動会は学校行事の一つに過ぎないが、海外では「チームワークの大切さ」や「全員で決めたルールを守る大切さ」を学ぶ手段の一つとして認知されている。

[10] ルース・ベネディクト（2008）『菊と刀』光文社 p. 292

[11] The expenditure by the Government of India on school education in recent years comes to around 3% of the GDP, which is recognized to be very low.

(<https://www.gnu.org/education/edu-system-india.en.html>)

[12] '教育educationという語は、ラテン語のe-ducereから来ており、これは文字通り「前へ導く」あるいは「潜在的にあるものを外へ引き出す」という意味である。' (E. フロム、『愛するということ』203頁)

→According to “Century Dictionary,” educere, of a child, is “usually with reference to bodily nurture or support, while educare refers more frequently to the mind,” and, “There is no authority for the common statement that the primary sense of education is to “draw out or unfold the powers of the mind.”

参考文献

①Dr. V. Sasi Kumar. The Education System in India (最終検索日：2019年7月26日)

<https://www.gnu.org/education/edu-system-india.en.html>

②文部科学省「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/attach/1309593.htm

③Tokyo Business Today 「What American Schools Can Learn from Japanese Moral Education in Schools」 <https://toyokeizai.net/articles/-/167166> (最終検索日：2019年7月24日)

④THE HINDU 「Modi for emulating Japan’ s education system」 <https://www.thehindu.com/news/national/modi-for-emulating-japans-education-system/article6370833.ece> (最終検索日：2019年7月24日)

⑤C. Seshadri (2006) 「Moral Education in India」, 『Journal of Moral Education』 p.7-13

⑥CNN 「The latent class on the Indian curriculum : Happiness

<https://edition.cnn.com/2018/07/18/health/india-delhi-happiness-classes-intl/index.html>

(最終検索日：2019年7月24日)

⑦文部科学省「日本型教育の海外展開推進事業について」

https://www.eduport.mext.go.jp/pdf/summary/subcommittee/20190131/20190131_2.pdf

⑧ルース・ベネディクト (2008) 『菊と刀』 光文社

⑨三輪博樹「インドにおける第17次連邦下院選挙の結果と今後の見通し」, 『Contemporary India Forum Quarterly Review』 p. 2-10 <https://mail.google.com/mail/u/1/#search/%E6%97%A5%E5%8D%B0/FMfcgxwChSPTfWVbBVqHF1CCnQQvHDfp?projector=1&messagePartId=0.1>

⑩沼田潤 (2009) 『日本の教育政策における異文化理解教育の位置づけ—問題点と今後の方向性に関する一考察』 p. 193-225

⑪ (1997) 『第1期日本インド学生会議活動報告書』 p. 50-53

⑫ (1998) 『第2期日本インド学生会議活動報告書』 p. 47-50

⑬ (1999) 『第3期日本インド学生会議活動報告書』 p. 77-80, 85-86

⑭ (2000) 『第4期日本インド学生会議活動報告書』 p. 77-79

⑮ (2001) 『第5期日本インド学生会議活動報告書』 p. 93-103

⑯ (2003) 『第7期日本インド学生会議活動報告書』 p. 68-71, 118-131, 138-143

⑰ (2004) 『第8期日本インド学生会議活動報告書』 p. 29, 33, 41-44, 85-87

⑱ (2006) 『第10期日本インド学生会議活動報告書』 p. 44-45

⑲ (2007) 『第11期日本インド学生会議活動報告書』 p. 117-122

⑳ (2012) 『第16期日本インド学生会議活動報告書』 p. 75-80, 98-100

㉑ (2013) 『第17期日本インド学生会議活動報告書』 p. 85-89

㉒ (2014) 『第18期日本インド学生会議活動報告書』 p. 65-66, 80-84

㉓ (2018) 『第22期日本インド学生会議活動報告書』 p. 105-106

→ブログなど

The Importance of Moral Education (最終検索日: 2019年7月27日)

<http://evirtualguru.com/essay-on-the-importance-of-moral-education-complete-essay-for-class-10-class-12-and-graduation-and-other-classes/>

<分科会スケジュール・活動内容>

第一回目：イントロダクション 2019年8月14日（水）@オリンピックセンター

9:00-10:00 事前学習発表（日本側）

10:00-11:00 事前学習発表（インド側）

第二回目：「命の教育」 2019年8月16日（金）@オリンピックセンター

The venue for discussion was the National Youth Olympic Memorial Centre. A total of 18 students participated in the discussion, including both Indian and Japanese students.

14:00-14:30 参考映像視聴

14:30-14:45 意見整理

14:45-15:00 グループ・ディスカッション

15:00-15:10 休憩

15:10-16:00 グループごとに発表

16:00-16:10 ディベートのチーム編集

16:10-16:50 グループごとにディスカッション、ディベート準備

16:50-17:00 撤収作業

17:00 完全撤収

◇視聴動画：「命の教育 ある高校教師の試み」 <https://youtu.be/509DuVWL66g>

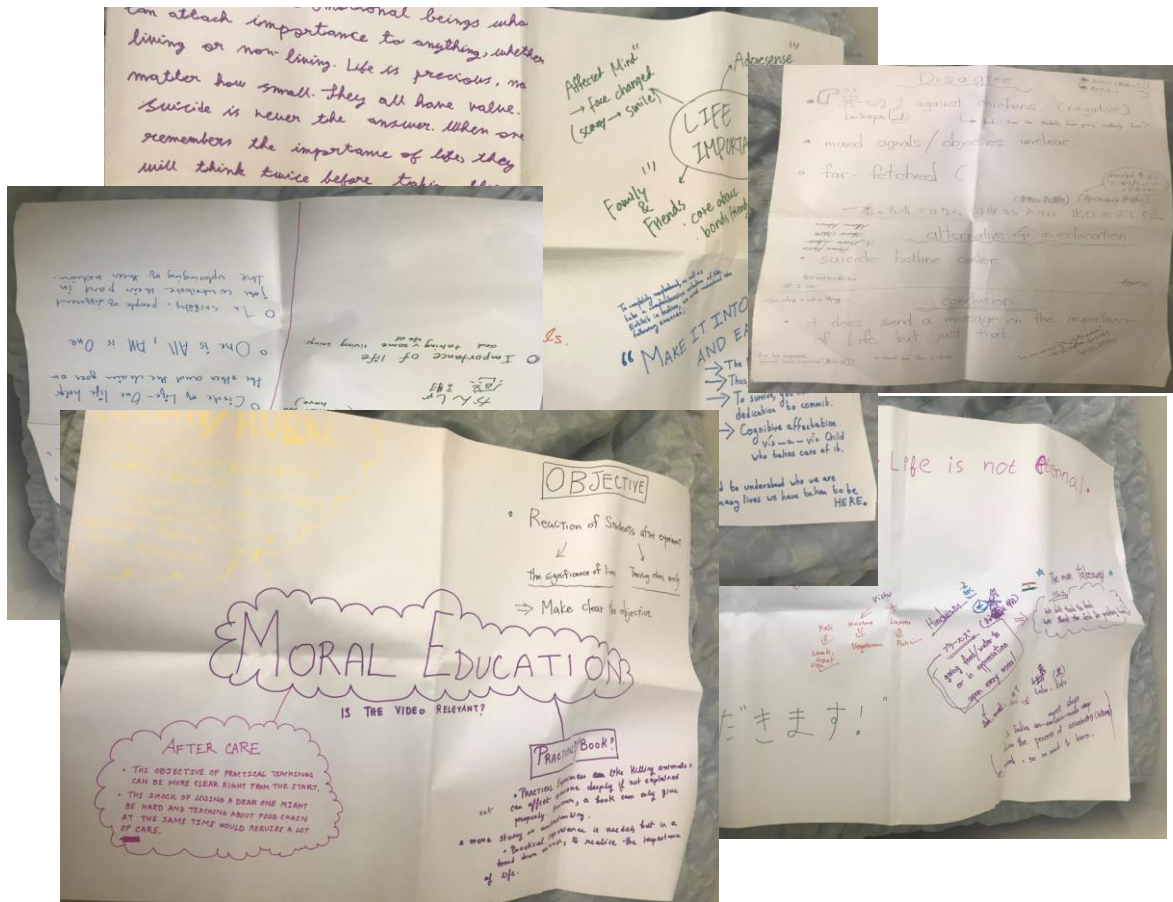
感想

The topic of discussion was the case study of a school lesson in Fukuoka, Japan. Kouji Manabe teaches his students the importance of life through the method of “the raising, dissecting, and then the eating of chicken”. It is an endeavor to raise awareness and to draw attention to the high rates of bullying and suicides in the Japanese society. Each child is given an egg to raise into a chicken-which they would have to put down and consume by saying 「いただきます」 (itadakimasu). It was an educational video of twenty minutes. Many of us were left poignant seeing the students in the school crying during the last class.

After watching the video, everyone divided into groups of four to discuss about the case. We were given a paper and some pens to write our views and opinion on. Everyone wrote points, drew diagrams and became creative with it. Each group presented their paper with their opinions on the topic. All opinions were appreciated and heavily applauded.

The next stage was the debate, whose topic was “Is this lesson effective and sufficient to handle the situation at hand?”. The room was divided into two groups for “for the notion” and “against the notion”. But since there was not much time left the debate had to be rescheduled to the next table discussion. However, each group wrote down their arguments and rebuttals in preparation for the next day.

Amey-san and Shibasaki-san also joined for the discussion. Amey-san is a teacher and from University of Tsukuba. Shibasaki-san is an acquaintance of Amey-san and she introduced the Prema Metta School to us. Prema Metta School is an officially approved elementary school in Bodhgaya, India. The school was established in 2006 and is successfully helping underprivileged children acquire education. They provide children with everything they need for education such as textbooks, uniforms, activities and food. Shibasaki-san encouraged us to visit the school and volunteer in teaching, preparing food, etc. We wish their effort is in great success and we wish to visit the school soon.



第三回目：「命の教育2」 2019年8月19日（月）@四ツ谷地区センター

The venue for the table discussion was Yotsuya Civic Center. A total of 13 students participated the discussion. The discussion was a continuation of the last one where it left off. It was a debate on “Is this lesson effective and sufficient to handle the situation at hand?”. Everyone divided into two groups which were “for the notion” and “against the notion”. Everyone used notes of the previous day as reference.

「推奨派」側の要点

1. First hand experience is more valuable than stories and experiences.
2. Hardships build the character of a person.
3. The children tried their best bringing up the chicks leaving no compromises.
4. Gives meaning to 「いただきます」 in the grand scale of nature and food chain.

「推奨派」側からの意見文

The lecture was worth understanding the importance of life. We cannot see the scene of killing chicken in usual lives. Through the experience that bring up chicken and killing by themselves, I think we could appreciate food and also all of things which supported our lives. Without knowing, we cannot realize the value of them. Not only hearing the story, but they did, brought up and killed, so it will be more impressive experience for students.

Also, the lecture has an effect on the students to think about their life again and it is a good chance to consider the importance of life before becoming mother or father, too. Bullying or abortion has increased recently, and it becomes one of the serious social problems in Japan. So, this will be a one of a chance to think about importance of life.

Some people might say, it is guilty to kill the chicken by themselves. In the beginning of lecture, the face of students observed the chicken curiously. After few days, their face or attitude changed to more relieved. They would love the chicken, gradually. The chicken is alive and the same living thing as us. However, even if the students hadn't killed the chicken, other people, clerk of chicken shop, would kill them, in this case. So, we can say it was responsible for taking care of the chicken until the end. We might not carry out this lecture entire nation, but even if some school don't have the chance, it needs to look for other ways. That will be one method to solve the serious social problems in Japan, too.

To sum up, I think this lecture deepen understanding of importance of life and gives students many studies, such as what is to be adults, friendships, and appreciation for usual live and good for students to learn life, and should be spread.

「反対派」側の要点

1. It is a gruesome experiment against animals-concept of "betrayal" towards the chicken.
2. Not effective or as accessible in urban or metropolitan cities.
3. Might induce trauma in children.
4. Not effective in dealing with mental health issues like suicide and bullying.

「反対派」側からの意見文

Though 「命の教育」 had some positive messages upon students who were given first-hand experiences of taking the lives of their own chickens, it was still difficult to fully associate with the teacher's plan. The big question is whether this class was committed towards the importance of life or to realize how valuable foods were. Many people thought this could have been a dangerous development, of course, because it could have potentially confuse the students about some crucial human elements and eventually the scale of what they are working on. Here the debate has to be changed.

It was pretty clear that the teacher was trying to teach the importance of life by letting the students to be parents. Not offering the students a piece of sieged advice of how to take care of their children and how to correspond actions with others to become better parents, those young parents learn a few. By the time they had to decide whether to slaughter their chickens, many students lost control and cried of fear and guilt. I hesitate to use the word "traumatic" but this it is. Something sudden happens and it rocks your world. Those who volunteered to execute their loved chickens also hesitated to face the end of the lives of their chicken and students looked around for their friends to calm them down. In this sense that class was much more focused to have an impact upon the students' minds. The question is whether we want to stay that way. It was alright but it sure was a costly like gambling.

Other options seemed to have been ignored for most of the students were shocked and crying to death confronting such act of slaughtering. We have a good supply of means to get first hand exploration into the importance of life. Suicide phone line is one among others. Another can be giving the learners to attend hospitals of chronic patients. Better or worse the least we could do at classes is to infer important lessons and not life-trueing experiences. We may be able to benefit from big experiences but cannot compromise worst hand-on experience with good classes.

「結果」

1. For urban cities, we can look into therapy and self-help.
2. Taking students to suicide prevention centers and talking with the counselors as to how they assist individuals with mental health issues.

We are so excited that we were able to welcome Indian students to Japan (Tokyo) and there are many reasons why the bilateral ties among students are becoming important these days. The number of Indians in Japan has been increasing. The increase in number can be felt daily as the amount of international students at respective universities, the number of the times India being referred to in lectures and seminars, just named a few reminds students of their increasing importance. Along with students, Indian workers can now be seen in various business occasions besides Curry restaurants that we have long imagined where Indians belong in Japan. With this in mind, the desire of the Japan India Student Conference is to provide a table where students can create their own dialogue through discussing on topics of international and individual importance. Relations between Japan and India is expected to get stronger, and the more stable the head of each countries are, the more willing the people of both countries get along. And the more people recognize the importance of partnership and relationship between these two countries, the more JISC receives expectations and anticipations. In this sense, the Japan organizing team is very excited to take this responsibility and get the Conference underway

In the next section, we explore how our cultural exchange activities aligns with what we have work on in classrooms. In the attempt to prevent our time and effort spent on the table discussion to be considered done for the sake of academia, this section where we try to apply our understanding of the importance of life in to our owns.

10. 【「教育」という観点からの文化交流会】

1. 調理実習

食は、文化や家庭を感じられる身近な存在の1つであり、味だけでなく、調理方法や食べ方、作法など、様々な側面から、各国の文化や慣習が感じることができます。また、日本では、調理実習を行う学校も多く、チームで協力する姿勢を身につけたり、家庭の味の違いを理解したりする良い機会です。本会議では、日本の食材の購入から、調理、そして実際に食するまでを体験してもらうことで、日本の食文化を理解、また互いの食文化の違いを理解し、共有することを目的としており、交流する中でより深い異文化理解ができるよう努めました。また、本会議プログラムでは、着物の着付けや歌舞伎鑑賞など、なかなか日常生活を感じることができませんでした。そこで少しでも私たちの日常を感じてもらえるように、スーパーに足を運び、食材を自分たちで選ぶところから行うことにしました。調理後、日本の調味料や食材が気に入り、お土産として買って帰ったインド人メンバーもいました。今回の調理実習がさらなる日本文化への関心や異文化理解のきっかけとなり、母国へ帰っても、家族や友人に、日本滞在の話の種になるかもしれません。調理実習に限らず、本会議全体に言えることですが、メンバー自身の経験に留めておくのではなく、周囲に語り、伝えていくことも異文化理解や国際交流の一つであると思います。身近な疑問や発見から、一つでも多くの新たな日本を知ってほしいと思います。

2. 大江戸温泉物語

大江戸温泉物語に行く、と耳にし「そんな呑気なことやってるの」と思われる。金魚掬いや射撃、お笑い劇場にリラクゼーションルームが揃う当館では「学生会議」を標榜する団体が活動する場所として相応しくないのかもしれない。しかし今はなき江戸時代を若者からお年寄りまで幅広い世代が楽しめるように再現し、かつ外国人にもうけるよう「JAPAN」を提供してくれる大江戸温泉物語には東京を理解する上で大切な何かがあるかもしれない。

大江戸温泉物語は元祖の温泉のモチーフにした温泉旅館である。経営破綻で失いかけた伝統とともに最新のサービスも兼ね備える。浴槽には赤富士が設えてあり、松竹林をモチーフにした内装が整備されている。風呂を出ると屋台が軒を連ねており、別場所には運動施設もある。緻密につくられたテーマパークであるからこそ、客足も伸びる。しかし大江戸温泉物語は施設がなす貢献以上に心温まるサービスがある。

将来日本で働きたい。そのような理由でインド人参加学生の一人が一目ぼれした財布を購入した。それだけでは物足りないだろうと言ひ、その後を通った私に財布に入れる用の御守をその子に渡すようにと預けてくれた。いまは遠くにいる私の孫娘に顔がそっくりで、せっかく日本に来たんだからいい思い出を作らせてあげなさい、と言う。

他では味わえない日本人との交流を味わえる。それが大江戸温泉物語だ。そもそもここに来る目的は「日本らしい」場所へインド人を招待することでワクワクしているインド人を喜ばせるためだった。しかしそれよりも、インド人と日本人の近さを感じさせられる機会でもあった。

3. ホームビジット

今回ホームビジット事業を実施した目的は、インド人学生が日本の「家族」文化の体験をすることだった。しかしその背景には、日本の一般家庭の暮らしや生活習慣、親と子の関係性、近所づきあいといった、ソトだけではなくウチの文化を感じ、より深く日本を理解してもらふ意図もあった。

受入家庭の都合上、インド人学生8名中5名がホームビジットに参加し、各家庭を訪問した。家族構成や居住地ともにバラバラで、下記ホームビジット感想文の通り、それぞれ違った体験が得られ、自国と日本の文化の違いを学んだことだろう。

インドといえば、「家族」を何よりも大切にする風習がある。家族と天秤にかけて敵うものはない。出産・育児から病気の世話をわたり、家族の問題になると、インド人は学校や仕事を休んでも家族を優先する。そのような家族からの厚いサポートがあるため、結婚後も親兄弟と暮らすケースが多い。それ故に、インドの家族はとても強い絆で結ばれている。一方、日本では、一昔前まではサザエさん一家のような二世帯・三世帯家族が一般的であったが、時代が進むにつれて「核家族」が増えてきた。要因の一つとしては、現代の若者が早々に両親から独立し、経済的な負担から家族計画を見直してきたことが考えられる。核家族になったことで、日本の家族関係は以前に比べて希薄化したと感じられる。同じ家に住みながらも、家族がバラバラで食事をする「孤食」という単語も生まれたほどだ。私たち日本人は幼い頃から両親に厳しく躰けられ、家族同士でも一定の距離間を保って互いに接している。したがって、インドの家族形態や子供の教育方法等を比較すると、その違いに驚愕する。現在、日本には核家族ゆえの問題や課題が多々ある。しかし、一見幸せそうに見えるインドでも、実は家族の結びつきが深すぎるゆえの問題を抱えている。それぞれ良い面悪い面があるが、文化の違いと捉えると非常に興味深い。

先進国でみられる核家族は、経済成長を続けるインドでも進んでいくかもしれない。今後もインドの発展に目が離せない。

～参加インド人学生の感想～

◇今住様宅

Members: Ratula and Koyel

On the 18th of August, 2019, my friend and team mate Koyel Mukherjee and I were privileged to be hosted by the Imazumi family for a home visit, as a part of the 23rd India-Japan Student Conference being held in Tokyo.

The Imazumi family was gracious enough to arrive till the place we were living at to pick us up. They seemed extremely approachable and friendly from the first meeting itself, and told us that it will take about an hour to reach till their place. The walk with them during our ride in train was also extremely interesting as Mr. Imazumi was a law student himself, and with whom I resonated a lot being a law student myself. The view through the train till their house was extremely picturesque as well as their house lied in the outskirts of Tokyo, in Fuchu. Whilst looking at tiny houses, we arrived to their apartment, which gave a very minimalist and neat vibe.

On reaching, Mrs. Imazumi told us that she will be cooking tempura and other authentic Japanese delicacies for us. They cooked fried pumpkin, shitaake and tempura for us with a traditional Hokkaido miso soup and rice, which Mr. Imazumi said is a specialty from his hometown.

Post that, Mrs. Imazumi made o-chaa or green tea in the traditional way as well as taught us how to hold the tea bowl in the traditional manner and drink it. We were also offered some Japanese jelly to eat along with the tea.

Mrs. Imazumi also, right at the inception of the day had told us that she'll give us an yukata trial, and just like she promised there was a session of wearing yukata and photos which was probably our most memorable and favourite part of the day.

After a bit of discussion and talking regarding India and Japan relations, we decided to leave. On the way, the Imazumi family was also extremely gracious to take us to an Anime Merchandise Shop in Shinjuku. Post the shopping, the Imazumi family dropped us back to our staying place, Orisen, by 6 pm and we bade farewell a

nd parted ways. Also due to their kindness, Koyel and I were able to take a cab ride in Tokyo, which we really wished for but were not sure about it happening.

It was a very interesting day and it helped us get an insight on how a regular day in Japan is lived by a Japanese family. We also hope to keep in touch with the Imazumi family and always be grateful for their immense kindness on that day.

◇大畑様宅

Members: Deepto and Praty

Ohata family lives in Higashi-Nakano in an apartment. The family consists of Shouko, her husband and a baby boy Kouta who is 2 years old.

We were greeted at the station by Shouko-san with her friends Yurie-san and Sakina-san and none other than the small Kouta-kun. Shouko-san, Yurie-san and Sakina-san were members of the 18th JISC held in Japan. They visited India the succeeding year to meet the friends they made last year.

We went to a supermarket to get groceries. The supermarket was very clean and organized. We bought okonomiyaki flour, bacon and cabbage. It was clear that we were cooking okonomiyaki (お好み焼き). The Ohata residence is not very far from the supermarket. The house is located on an inclined street.

We were instantly taken aback by the spacious playing room for Kouta-kun which also had double carpets on the floor. Right when he entered the room, Kouta-kun got playful. But first we had to fill our tummies.

Yurie-san blanched edamame (枝豆) to go with the the black coffee. Sakina-san started preparing the sides: dashimaki tamago (だし巻き卵), salad. And Shouko-san started preparing the okonomiyaki batter. Deepto and I cooked one okonomiyaki each. Everyone was served hiyashimen (冷やし面) to go with the rest of the food. The food was as homely as it gets and we were full before we even knew it.

Kouta-kun started getting comfortable with us and shared his toys and snacks with us. We headed out to go to Sanukiya, a wagashi (和菓子) restaurant located along the Kanda River. It was a peaceful walk and a pleasant restaurant. We had tokoroten (ところてん) and anmitsu (あんみつ).

We walked back to the residence and took rest as it was really humid and hot outside. Kouta-kun was still very energetic and ran around at the entrance of the house as we were leaving. We exchanged souvenirs and bid our thanks with お世話になりました (thank you for looking after us).

◇奥村様宅

Members: Rupkatha

I was supposed to visit the 奥村family on Saturday. The Okumura family has four members: father, mother and their son Atsushi, daughter Erika. On 17 August, Saturday, Mr. Okumura Jun came to the Olympic Center to pick me up at 10 in the morning. After getting introduced to each other, we set off. We spoke in a mixture of Japanese and English.

He discussed with me the plan for our day. At first we would go to Shibuya, and take a look around. Then we would take a train to Jiyūgaoka, where the Okumura family lived. Armed with this much information, I followed him into a taxi. It was my first taxi ride in Japan! While briefly talking about his family, it turned out that Atsushi-san and Erika-san were close to me in age. Hence we decided that I call Mr. Okumura お父さん! お父さん told me that he has got to know how much I love stationery items and little knick-knacks. So he has decided to take me to Tokyo Hands, Shibuya. Upon entering the huge building, I was thrilled. There was so much to see! お父さん showed me around the store and said that this happens to be a popular spot for his foreign friends! After shopping there, we walked through the pretty streets around, talking about our life in general and my experiences in Japan. Turns out he has been to India a few times for his job and is involved in Indo-Japan activities! We visited 宇田川町 (Udagawacho) Spanish Street, and it was a very beautiful nook near the busy Shibuya. We clicked pictures and quickly checked out a few more stores. Soon we took the train from 渋谷 to 自由が丘. Next, we would take a bus to the Okumura residence. There was some time for the bus to arrive, so we went to a Starbucks in 世田谷 (Setagaya) City near Jiyūgaoka station. I love coffee, so I was very excited. I was looking forward to trying the famous Japanese Matcha Latte, but unfortunately that particular outlet didn't seem to have it. Finally I ordered a coffee whose name I do not remember, but it tasted heavenly. お父さん ordered iced coffee, and we continued to talk: about his work, about my university, life in India and Japan, administrative differences between

the two countries, educational atmosphere in the university levels of Kolkata and Tokyo, and much more. We were so immersed in our discussions that when it was time for the bus to arrive, we noticed just at the nick of time.

Something I have noticed in Japan is that they have a lot of free bus services in specific routes. This was one of those buses. The interior was so beautiful and well-kept and the service was so great that it reminded me of a business-class on an airplane. The road we took on the bus through the streets of Jiyūgaoka to the Okumura residence was very picturesque, to say the least. It was a slightly hilly area with beautiful roads and buildings, big and small houses that were one of a kind and trees all over. We got down from the bus and walked for about 2 minutes.

The Okumura family lives in a big residential complex. Upon entering, we went up the elevator, and was finally greeted by お母さん, Mrs. Okumura, at the apartment door. She was a very sweet lady. I took off my shoes at the 玄関 and put on the home slippers. お母さん was a very amicable. She helped me get comfortable in their home and showed me around. Their balcony provided with a breathtaking view of Jiyūgaoka, its surroundings and Tokyo City. Tokyo Tower, Skytree, Roppongi Hills were all visible in the distance. After taking some pictures, it was already lunch time. We sat down to a sumptuous meal of Japanese カレー, rice, vegetables, salads and tea, lovingly prepared by お母さん. I got to know that since they were not sure whether I would be non-vegetarian, they prepared a vegetarian meal for me! It was very considerate of them. お母さん informed me that Atsushi-san was busy with his sports and Erika-san was away in Australia, with a home-stay family. Hence I couldn't meet them. But I used the opportunity to have a great long discussion with お母さん and お父さん. お母さん talked about all the times they have lived abroad, their children who were born abroad, and how the kanji-s of all of their names were somehow related to each other or to the places they were born. This fascinated me a lot. We talked about my mother tongue, the languages I am proficient in, and I showed them how I write my name in Bangla! It was a great discussion over lunch. I wanted to keep talking to them. We talked about their daily lives. We have also spoken about Japanese history, Indian history, and India-Japan relations. In the afternoon, it was time to leave again. お母さん gave me a lot of snacks, tea and gifts. I gave them some Indian snacks, a note, a few things from Kolkata and some handmade items as a token of appreciation. I bid Mrs. Okumura go

odbye. We took a lot of pictures. I gave my best wishes to Atsushi-san and Erika-san, and set out. Jiyūgaoka is a very picturesque place. We went to Little Venice in Jiyūgaoka. It was a pretty corner in the town that is built to look like Venice. It had a European charm and was very beautiful overall. We saw some cute dogs and cats and clicked a lot of pictures. We visited 自由が丘スイーツフォレスト (Jiyūgaoka Sweets Forest) too. Soon after, it was time for dinner. We went to a quaint farmer's cafe and met one of お父さん's Indian friends. The cafe had a great ambience, and we had a delicious dinner. It was a very new experience for me. The day was coming to an end. While heading off to Jiyūgaoka station for our return journey, we saw a very colourful festival on the road. People were dressed in costumes, carrying flags and instruments, making music and dancing on the roads. It was as a nice surprise, and an energetic way to end the day!

I had a very nice time with my host family. They were really kind and considerate people, and ready to welcome me with open arms. It is as though I have my Japanese family in Jiyūgaoka. I am fortunate to have experienced Japanese family and hospitality. Hope we can meet again in the future!

4. 歌舞伎鑑賞体験

日本のサブカルチャーは若い世代によく浸透している。日本を訪れると、「しぶはら」と「あきば」はもはや定番スポットになっている。もちろん伝統的な文化も触れている、観光客は「和」を求めて浅草にやってくるのである。

もちろん観光であれば、それで十分だろう。しかし私たちは学生会議として、より深い日本文化を体感しようとした。そこで私たちは歌舞伎鑑賞に行ったのである。歌舞伎では、1つの舞台としてだけではなく、日本の歴史や日本古典文学の背景や構成などの学習としても良い題材である。また、日本舞台芸術の核も、ここから学ぶことができるのである。歌舞伎鑑賞を通して、インド人メンバーだけではなく、我々日本人メンバーにとっても勉強になった。歌舞伎鑑賞時の内容面はもちろんだが、その他にも鑑賞時のマナーなど、日常生活の中の非日常として、良い体験になったのではないかと思う。

ベンガル地方はロビントロナートのゆかりの地として、インドの中でも文学や文化に関心を持っている町であり、自分たちの歴史や文化により一層誇りを持っているのである。そんな彼らにとって今回の歌舞伎鑑賞はカルチャーエクステンジとして良い経験になったのではないかと思う。

5. スバス・チャンドラ・ボース忌法要式典

私たちは8月18日に、スバス・チャンドラ・ボースの忌法要に参加した。この式典は都内の連光寺という小さなお寺で行われている。チャンドラ・ボースは日本ではあまり馴染みのない名前ではあるが、インド独立の父と称されるほどの偉人である。チャンドラ・ボース早期時代、マハトマ・ガンディーとともに非暴力運動を行ったが、途中で限界を感じ始め、急進派に走った。最終的に彼はイタリアやドイツのファシズム勢力と親しくなり、第二次世界大戦敗戦後、亡命の人生を歩むことになったが、インド独立の思いはガンディーと同じく強かったのである。また、豊富な知識や素晴らしい考え方を持っている彼の人柄は誰にも慕われるものであった。1947年8月15日は、ともにインドが独立を宣告した日、そしてその他諸国が建立される日でもある。チャンドラ・ボースはその3日後に亡くなった。彼はインド独立のために自分の人生をかけて戦った。我々はインド独立という喜ばしい気持ちとともに、その裏には戦争があり、たくさんの方が犠牲したとうことを忘れてはならないと思う。この式典の参加は、私たちに歴史を振り返る重要な一環ともなり、両国の学生交流を通して、世界平和に僅かな貢献をするという最終的なゴールを再認識できたのである。

11. 【Message to delegates from Kolkata】

JISC is a partnership between students from both Japan and India, offering a sustained academic program and a forum of exchange to facilitate discussions of the most important economic, political, and social issues relevant to these two countries. The academic program offered by the organizing committee of the host community comes in various formats each year. Company and institution visits are carefully organized so that delegates and the host could make the most out from the whole program. The Indo-Japan society also expects some founded results that can prove the visit has enliven the minds and understanding of the topic which the delegates have been working on before and throughout the conference.

Likely, “Education” has been chosen as the main theme of the 23rd Japan-India Student Conference. Delegates have examined and compared the strength and weakness of respective educational systems, such as the social settings of schools and universities within each countries, key authorities that develops and maintains disciplinary procedures and actions against youth, and of course the Japanese style moral education which president Narendra Modi is also fond of. Table discussions has long been arranged so as to meet certain academic criteria, and this mission has long been the passion of the students from both countries to apply for this conference. However, aside what I have explained, there seems to be a reason why JISC has emerged as the most sustainable annual event at the student level.

Over the years, our philosophy and program has been carefully arranged so as to align with the purpose and passion of each individual delegates. In the attempt to enliven future leaders, the main activity during the conference has been dedicated to the table meetings as always. However, we the committee members has promised to organize this year’s conference to help participants explore new perspectives, including a whole range of other networking sessions such as cultural workshops, home-stay, sightseeing, and university visit. With this, participants has been provided an opportunity to take off for an adventure to explore different parts of Tokyo. We the organizing committee are also students. And students have been expected to show dedication and responsibility as representatives of their respective countries as this Student Conference may influence the minds and souls of potential future leaders. Therefore, the 23rd Japan-India Student Conference have worked and gave close attention not to impose what we think is helpful and promising as good teachers of school wouldn’t.

This dramatic shift within the in-built mindset of the program would not have been possible if it wasn't for the dedicated and responsible students selected through our competitive process to attend this conference and win an opportunity to explore cultural and social differences. It is only through the active participation of highly qualified delegates. Now it seems fair to say that the hard-working and courageous effort of the delegates has breakthrough our image of India, and with the strength and potential of the Indian Individuals been recognized domestically and internationally, Japanese students has many to learn from them. And the 23rd Japan-India Student Conference organizing committee are very grateful to promise that this year's participants has done a wonderful job to foster solid relationship with the Japan side.

I here then would like to answer to the calls for an international forum of exchange by our sponsors. On behalf of The Japan India Student Conference (JISC) organizing committee, I am sincerely thankful for the people and sponsorship from many understanding individuals that this organization has prospered for over 22 years. Again, I would like to express my sincerest appreciation to those who shared our philosophy.

In conclusion, we have been seeking a better future by exchanging our opinion from each viewpoint, and we still believe that we can create strong relations between the two nations by taking place this conference. In the attempt to strive for a continuous improvement to make sure that this future conferences can be held even better, the 23rd Japan-India Student Conference committee member will be more than pleased to support future delegates who shares our philosophy.

23rd Japan-India Student Conference

President Haruhito Mochizuki

12. 【協賛・後援への謝辞】

第 23 期日本インド学生会議の活動におきまして、私達は非常に多くの方々にご支援、ご協力を賜り、様々な面で助けて頂きました。学生会議と申しましても、学生だけではどうしても力の及ばないところや、目の行き届かない点多々ございます。そのような時、皆様からの助言が、私達をより実りある方向へと導いてくださいました。

下記の方々を初めとする、多くの方々にご尽力頂き、第 23 回目となる日本インド学生会議を無事に開催できましたことを、この場を借りて実行委員一同心よりお礼申し上げます。今後、第 22 期実行委員は任期を全うした後も OBOG として日本インド学生会議をサポートし、より良い学生会議づくりに励む所存でございます。これからもより一層のご指導いただけますよう、宜しくお願い申し上げます。

2019 年 10 月

第 23 期日本インド学生会議実行委員会 実行委員一同

後援

公益財団法人 日印協会
国際交流基金
在日本インド大使館

助成・個人協賛

公益財団法人 双日国際交流財団
公益財団法人 三菱UFJ国際財団
勝田 友治様
カナイ タケシ様
櫻井 秀武様
鈴木 正則様
鈴木 千歳先生
タカナシ カズユキ様
中村 行明様
他有志の皆さま

顧問

国際基督教大学上級准教授 近藤 正規
長浜 浩子

協力

コルカタ 日本語会話協会 (Nihongo Kaiwa Kyokai)
チェンナイ ABK-AOTS DOSOKAI
日本インド学生会議OBOG会
東大インド事務局東京大学社会連携部渉外部門インドシニアアドバイザー 吉野宏様
ホームビジット協力のご家庭
今住 和代様
大畑 晶子様
奥村 淳様
北爪 裕子様 (和服着付け体験)
清水 まなみ様 (津軽三味線演奏)

創設発起人

故 石津 達也
長浜 浩子
後藤 千枝

13. 【写真集】

インド人たちと過ごした日常をここでは提供いたします。







14. 【歴史・沿革】

西暦（年号）	日本インド学生会議の歴史
JISC発足前	日中、日韓、日土（トルコ）、日中（中東）と共に日印学生会議の発足を石津達也が構想する。
1996年 8月～11月	初代石津達也、長浜浩子、後藤千枝が8月に日本インド学生会議創設事務所を、来る10月に第1期JISC実行委員会を発足。
1997年	3月にカルカッタに第1回先遣隊を派遣。8/2-9/11会議決行。
1998年	アジアクラブ、インド政府観光局主催イベント「ナマステ・インディア」参加。 4月に第1回総会の開催より各種規約施行 12月に「再考・JISCの基本理念」討論会第1回開催
1999年	1月に第1回学生会議連絡協議会フェアに参加 JISC公式ホームページ、メーリングリストの作成 5月に（財）日印協会主催「川岸前カルカッタ総領事のお話を聞く会」参加 6月にパラナス・ヒンドゥー大学ヤーダヴ教授をお迎えし会議を主催
2000年	9月に「森総理南西アジア訪問」講演会に出席 10月に（財）インドビジネスセンター主催「日印ITシンポジウム」参加 10月に（財）日印協会主催「駐日インド大使午餐会」出席 11月にIJSC（インド側）発起人モハン・ゴージュ氏を囲む会主催国際基督教大学学園祭参加し、同月学生会議連絡協議会（SCN）会同報告会参加 12月に駐日インド大使アフターブ・セート閣下講演会参加
2001年	2月にデリー側チャウラ先生、トマル先生を囲む会開催 5月に議員連盟、外務省アジア太平洋州局南西アジア課訪問 6月に山内利男氏を招きヒアリング勉強会、日印経済委員愛甲次郎氏による講演会を主催し、同月岐阜女子大学南アジア研究センター主催「日印ITシンポジウム」参加・協力 11月亜細亜大学学園祭参加
2002年	4月に第3期、筑波大学小野基教授からヒアリングし、同月SCN参加 7月に国交樹立50周年記念行事インドメラー参加
2003年	4月にSCN参加し、6月に学生会議連絡協議会情報交換会に参加 10月に社会還元事業として小学校訪問 11月「インドの魅力を発見する会」にてパネルディスカッションに参加
2004年	3月大使館主催リセプションに参加し、4月にSCN参加 10月に社会還元事業として小学校訪問
2005年	4月にSCNに参加
2006年	4月にSCNに参加し、6月にインド大使就任リセプションに参加 7月に上方舞友の会、吉村桂充氏訪問
2007年	1月アイセック主催インド勉強会参加 7月日印交流年イベントとして認定 11月に12期メンバーからヒアリングし、12月日中。日露学生会議と合同公演会主催 12月国際開発研究者協会（SRID）にて講演会及び勉強会
2008年	5月に日中。日露学生会議と東京大学にて学生会議合同公演会主催
2009年	
2010年	6月ソフトブリッジソリューションズ訪問
2011年	
2012年	5月国交樹立60周年記念イベント認定 6月笹井大嗣氏、7月に中津雅昭氏による勉強会
2013年	2月日本イスラエル。パレスチナ学生会議と合同イベント
2014年	

2015年	
2016年	5月に地域リーダー・若者交流助成プログラムに採用 6月に全国大学国語国文学会60周年記念大会参加し、同月Air India日本支社訪問
2017年	
2018年	5月に世界子供サミットに参加
2019年	

*グレーでハイライトされている年度はインド（カルカッタ、デリー、プーネ、チェンナイ、バンガロールにて開催）

顧問

1996年 東海大学文学部教授臼田雅之氏就任

1999年 拓殖大学福永正明氏就任

2002年 麗澤大学保坂俊司氏就任

助成・協力

1998年4月 （財）国際教育財団より助成金給付

その後1999年、2001年、2002年、2003年、2004年、2007年

6月 （財）三菱銀行国際財団より助成金給付

その後1999年、2000年、2001年、2003年、2007年

9月 （財）吉田茂国際基金より助成金給付

その後1999年、2000年、2001年、2002年、2003年、2004年、2007年、2008年、2010年、

2001年7月 （財）国際交流基金より助成金給付

その後2002年、2003年、2007年（デリー側）、2008年、2010年、2012年（デリー側）、2013年、2015年、

2001年9月 （財）日商岩井国際交流財団より助成金給付

その後2003年、2004年、2007年、2008年

2002年10月 （財）東京都国際交流財団より助成金給付

その後2003年、

2007年7月 日印交流年実行委員より助成申請受理

2008年3月 双日国際交流財団助成金給付

その後2010年、2012年、2013年、2014年、2015年、2016年、2017年、2018年、2019年

2008年6月 日印協会より助成金給付

2008年6月 三菱UFJ国際交流財団より助成金給付

その後2010年、2011年、2012年、2013年、2014年、2015年、2016年、2017年、2018年、2019年

後援

2002年4月 在インド大使館後援名義受理

その後2007年、2008年、2010年、2012年、2013年、2015年、2018年、

2002年5月 インドビジネスセンター後援名義受理

その後2011年

2002年7月 日印協会後援名義受理

その後2002年、2008年、2010年、2011年、2012年、2013年、2014年、2015年、2016年、2017年、2019年

2002年7月 アジアクラブ後援名義受理インドセンター後援受理

2002年7月 外務省後援名義受理

その後2007年、2008年、2011年、2014年、

2004年8月 在コルカタ日本総領事館より後援名義受理

その後2007年、2008年、2010年、2012年、2013年、2015年、2018年

2007年6月 在ムンバイ総領事館より後援名義受理

2008年4月 在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理

2010年、2012年、2013年、2015年

2008年5月 インドセンター後援名義受理

2011年8月 独立行政法人国際交流基金後援名義受理

2016年、2018年、2019年

2011年8月 JICA後援名義受理

2011年9月 経済産業省後援名義受理

2011年9月 在日本インド大使館後援名義受理

その後2013年、2014年、2015年、2016年、2017年、2019年

2012年7月 日本文化センター後援名義受理

2014年9月 在日インド商工協会後援名義受理

2014年9月 ディスカバリーインディアクラブ後援名義受理

15. 【日本インド学生会議規約】

日本インド学生会議規約 前文

日本インド学生会議は、日本とインドの両国の将来のために協議し、共に討議を行うことによってさらなる相互理解を深めることに最大の目的を置く団体である。ここに本学生会議が全ての学生に対してその門戸を平等に開き、本団体の主体を学生とすることを宣言し、この規約を確定する。

そもそも本学生会議は学生の自主参加によるもので、会議全体の企画・運営は本会議を構成する学生にその権威を与えるものとし、その決定は構成員全体がこれを享受する。我々日本インド学生会議は、この規約を本学生会議における基本原理とし、これに反する如何なる規則、規定および決定を排除する。日本インド学生会議は、両国そして国際社会の将来のために、全力を挙げて本団体の目的を達成することを誓う。

第一章 総則

第一条 名称

本団体は正式名称を「日本インド学生会議」とし、英語名を「Japan-India Student Conference」とする。また、省略名称として「JISC（ジスク）」を使用する。各代実行委員会に対しては「第〇期日本インド学生会議実行委員会」、年一回の本会議に対しては「第〇期日本インド学生会議本会議」を正式名称とする。尚、場合により「〇〇年東京（カルカッタ）大会」などの名称も使用する。（〇は英数字とする。）

第二条 活動

（一）本学生会議は、前文で掲げた目的を遂行するために、以下の活動を行うこととする。

1. 本会議の開催 2. 本会議の準備のための定例会および勉強会の開催 3. 会議の議事および諸活動を記録した報告書の作成 4. 会議の成果を社会に還元するための報告会の開催 5. 以上の目的を遂行するために必要と思われるあらゆる活動

（二）本学生会議は、前文の内容に鑑み、特定の政治・宗教・信条から中立である。

第三条 規約

本団体は、この「日本インド学生会議規約」以外に、以下の各種規約・文書をそれぞれ設ける。

「日本インド学生会議実行委員会規定」「日本インド学生会議 OB・OG会（仮称）会則」「日本インド学生会議会費規定」「日本インド学生会議 創設趣意書」「日本インド学生会議 基本理念」「日本インド学生会議 各代実行委員会趣意書」「日本インド学生会議 長期計画案」

第二章 構成員および組織

第四条 構成員

日本インド学生会議は、実行委員、OB・OG 会員、発起人、顧問、賛助会員から構成され、これらを総括して構成員とする。

第五条 実行委員

日本インド学生会議実行委員たる要件は、別規定でこれを定める。

第六条 発起人

発起人は、本会議発足を全面的に援助し、創設のために用意された創設事務局経験者（石津達也氏、長浜浩子氏、後藤千枝氏）の3名である。

第七条 顧問

本団体は、一名以上の常任顧問を置く。顧問は本会議の主旨および目的に賛同し、かつ社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員会が委託する。

第八条 会計監査

本団体は一名以上の会計監査を置く。会計監査は社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる外部の自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員が委託する。

第九条 賛助会員

賛助会員は、創設事務局経験者、顧問経験者、および本会議実行委員会が本会議運営における協力者と認めたものとする。賛助会員は、本会議の活動報告を随時受ける権利を有する。

第十条 OB・OG会

OB・OG 会は本学生会議実行委員会経験者によって構成される。OB・OG会会員たる要件は別規定でこれを定める。

第十一条 総会

日本インド学生会議は、本団体の最高決定機関として総会を設置する。総会は以下の事項を決定する。一、 役員の選出および罷免 二、 役員の退会 三、 予算および決算 四、 顧問の委託 五、 規約の改正 六、 その他必要と思われる事項、また総会は、現役実行委員長により招集され、全現役実行委員の三分の二以上（但し OB・OG の議決権が有効な事項に関しては、OB・OG 会事務局全員と全世話人の三分の一以上も含める）の出席で成立し、出席者の過半数で議決を採択する事ができる。主な議案に対する、現役・OB/OG が持つ議決権の一覧は以下の通りである。

<議案>	<現役の議決権>	<OB/OG の議決権>
役員の選出および罷免	○	
役員の退会	○	
予算の承認	○	
決算の承認	○	○
顧問の委託		○
規約の改正	○	○
本会議の解散	○	○
活動方針の変更	○	○
OB/OG 会に関する事項	○	○

第十二条 任期および会計年度

(一) 任期および会計年度実行委員会は、その年の本会議より四か月以内に改組し、その後、約1年間を任期および会計年度とする。(二) 業務の延長前項の任期の終了後も、実行委員会が必要と認めた業務に関しては、前任実行委員はその業務の遂行を求められ、それを拒否することはできない。

第十三条 退会

(一) 実行委員の任期中の退会は、実行委員長および当該者が所属する局長に届け出、承認されることにより認められる。(二) 実行委員長および局長の退会は、実行委員全員の承認を必要とする。

第三章 処分

第十四条 処分

長期に渡り実行委員としての義務を果たさず、かつ実行委員長、副実行委員長およびそれぞれの所属する局長に報告をしないもの、または前文に掲げた主旨および目的に著しく背く言動・行動をとり、なおかつ本会議運営に極めて支障になると認められる言動・行動をとる構成員は、規定の有無にかかわらず、実行委員会の承認を経て実行委員会の名において、強制退会を含む適切な処分をすることができる。

第四章 附則

第十五条 執行期日

この規約は実行委員長により公布され、実行委員全員の承認を得た時点でこれを執行する。

第十六条 改正

本会則の改正は現役実行委員会により発議され、第十一条の用件を以って、承認される。
第一回改正平成11年1月、第二回改正平成12年4月

日本インド学生会議実行委員会規定

第一章 実行委員会

第一条 実行委員会学生

学生たる構成員は、例外を除き全ての実行委員としそれを総括して実行委員会とする。

第二条 実行委員の平等および義務

実行委員は、平等に本会議の意思決定に参加し発言する自由を保障される。また、実行委員は定められた金額の会費を納める義務を負う。

第三条 実行委員長および副実行委員長の選出実行委員会は、本会議を代表する実行委員長を一名選出し、またこれを補佐する副実行委員長を三名まで選出することができる。

第二章 局

第四条 局の設置

実行委員会は、本会議の運営を円滑化すると共に義務の分散を図るため、下記に定める 局を設置する。また実行委員会は、必要に応じて新たに局を設置し、本会議の運営および業務を円滑に、かつ滞ることのないようにしなければならない。一、国内渉外局 二、国際渉外局 三、学術局 四、総務局 五、企画局 六、財務局 七、広報局

第五条 局の運営

局の運営は各局で局令を発行し、それに準ずることとする。

第六条 局長および副局長の選出

実行委員会は、各局一名の局長を選出することを要する。また各局長は、これを補佐する副局長を二名まで選出することができる。

第七条 国内渉外局

国内渉外局は、本会議の日本国内の関係者および関係団体との連絡をその職務とし、活動報告等を随時報告するとともに、本会議活動を継続させるために必要な財源開拓等の渉外か通津を滞りなく行わなければならない。

第八条 国際渉外局

国際渉外局は、本会議のインド側関係者および関係団体との連絡をその職務とし、必要事項について随時連絡しなければならない。

第九条 学術局

学術局は、分科会トピックに関する勉強会およびその他の講演会等を計画することをその職務とし、学生が有意義な学習をする機会を提供しなければならない。

第十条 総務局

総務局は、本会議の通常活動を円滑化することをその職務とし、定例会の会場予約・必要書類および名簿、その他の財産の保管をしなければならない。

第十一条 企画局

企画局は、会議開催に関する諸々の企画・計算を創ることをその職務とし、本会議の目的および各実行委員の意志を反映した企画をしなければならない。

第十二条 財務局

財務局は、本会議の財政を管理することをその職務とし、全ての支出入を記録し、予算作成および決算報告をしなければならない。

第十三条 広報局

広報局は、本会議の活動についての広報および実行委員募集の広報をすることをその職務とし、全国の（過渡的な処置として、創立から数年間は首都圏のみ）大学・大学院・短期大学・専門大学に対して広報活動しなければならない。

第三章 附則

第十四条 改正

本会則の改正は現役実行委員会により発議され、「日本インド学生会議規約」第十一条の用件を以って、承認される。

第十五条 執行期日 本規定は、公布の日からこれを執行する。

日本インド学生会議 OB・OG 会（仮称）会則

第一条 目的

日本インド学生会議 OB・OG 会は以下の三点を目的として活動する。一、物心両面において現役実行委員会の活動を支援する。二、本学生会議構成員相互及びインド側 OB・OG 会との持続的な親睦・交流の輪をつくる。三、日本インド学生会議の精神を体現し、持続的かつ長期的な活動の実現と、社会還元への模索を続ける。

第二条 会員の資格及び権利

OB・OG 会会員の登録資格は実行委員経験者及びそれに相当する者とし、実行委員会退任時に、引退し会員となるか、退会しいずれの権限も有さないかを選択する。OB・OG 会会員は、名簿に記載され、機関紙および報告会・総会・その他現役実行委員会およびOB・OG 会事務局が重要と判断した会合の通知を受ける。また、以下の議決権を有する。・本会議の解散・活動方針の変更・会計報告の承認・規約の改正・その他の重要事項・OB・OG に関する全ての事項なお、本人の退会の意思がない限り、毎年度自動的に継続して会員登録されるものとする。

第三条 会員義務

OB・OG 会会員は、以下の事項を守らなければならない。・毎年一定額の会費を納入する。またその際、納入期限を厳守する。一年以上滞納した場合は退会しなくてはならない。・住所等連絡先に変更のあった場合は、速やかに各期代表世話人及び事務局に報告する。報告しない場合、会費が納入されても必要な通知が届かないことは、会が任を負うところではない。また、連絡がつかない場合、自動的に退会と見なされる場合がある。・本学生会議の主旨および活動方針を尊重する。これに著しく背く行動・言動をとる、または運営に極めて支障になると認められる行動・言動をとる会員には、事務局が強制退会を含む適切な処分をすることができる。・本学生会議の主旨に同意し、本団体の目的達成のために活動する。

第四条 OB・OG会

OB・OG会では、各期から一名の代表世話人を選出し、その中から会長・副会長を一名ずつ選出する。また、実質的な事務を行うものとして、委員を原則として三名引退一年目の期から選出する。これらを事務局とし、任意は原則的に、代表世話人は二年以上、会長及び副会長は二年以上、役員は一年とする。

第五条 事務局及び代表世話人の職務

(一) 会長、副会長

会長、副会長は、OB・OG 会の代表として、以下の事項が滞りなく進むよう指示を出し、会の運営に責任を負う

(二) 委員

事務局委員は、以下の担当事項を職務とする。・総務担当役員：会員名簿・各期財産リスト管理・財務担当役員：会費徴収と財務管理・企画・窓口担当役員：OB・OG 会総会、その他行事の企画、現役実行委員会との連絡窓口

(三) 各期代表世話人

代表世話人は以下の事項をその役割とする。一、名簿管理の円滑化：同期会員の住所などの連絡を受け、事務局に連絡する。なお、各期の名簿は代表世話人が管理する。二、会費徴収の円滑化：事務局より同期会員の会費未納者の連絡を受け、当人に納入を促す。三、財産保管：各期の報告書・資料等、全財産を管理・保管し、要請があれば提出する。

(四) 事務局役員変更規定

会長・副会長・代表世話人・事務局員などが任期中にやむを得ない理由でその職を退任する場合、退任者本人が、後任の者を推薦し、総会での可決をもって変更の承認を得ることとする。

第五条 資金

OB・OG 会の活動は、全会員の会費の 3 割で行うものとする。残りの 7 割は現役実行委員会の活動費に寄贈する。

<日本インド学生会議 OB・OG 会>

事務局

・会長一名 ・副会長一名 ・委員三名（総務、財務、企画・窓口）

↑ 各期代表世話人 ↓ 各期会員

第六条 活動及び会計年度

OB・OG 会の活動及び会計年度は、「日本インド学生会議」第十二条に定める、その年の現役実行委員会の任期に伴うものとする。

第八条 OB・OG 会総会

OB・OG 会では現役の年度末に総会を開催し以下の事項の議決・承認をとる。一、活動報告 二、会計報告 三、役員を選出 四、その他、必要な議題 また OB・OG 会総会は事務局全員と全世話人の三分の一以上の出席及び委任状提出をもって成立し、出席者の過半数で議決を行うことができる。

第九条 付則 この会則はその発行をもって施行される。

第一回改正 平成 12 年 4 月

16. 【編集後記】

今期初参加、渉外局の大塚圭華です。今年の日印学生会議は東京開催ということで、夏真っ盛りのお盆の時期にインドから8名の学生を迎え入れました。

初めに、ホストする側として不安はありましたが、インド側参加者はすんなりと日本に溶け込み、安堵したのを覚えています。そして本会議期間はあっという間に過ぎていき、オリンピックセンターでの共同生活によって私たちの絆は一層深まりました。学びも遊びも全力で取り組み、非常に濃い毎日でした。

この報告書を作成するにあたり、本会議中の写真を見返していましたが、インド人メンバーと過ごした慌ただしく騒がしくもエネルギーに満ち溢れた日々を思い出し、懐かしい気持ちでいっぱいになりました。次は、互いにパワーアップした姿で再会できることを切に願っております。

報告書には、私たちの10日間の活動が凝縮されています。本書を通じて、インド人学生との交流から感じたことや学んだことが伝われば幸いです。

また、日頃お世話になっている方々や共に活動している仲間への感謝の気持ちを忘れず、今後も日印関係の発展に向けた活動に尽力してまいります。この場をお借りして最後のご挨拶とさせていただきます。

2019年10月22日

第23期日本インド学生会議 渉外局 大塚 圭華

第23期日本インド学生会議 活動報告書

2019年10月発行

編集 渉外局 大塚 圭華

発行 第23期日本インド学生会議実行委員

代表 望月 晴仁

印刷・製本 キンコーズ・ジャパン株式会社

